エト7K-5

訂校一矢賀芳
作心浄浦三

慶長見聞集

東京
合資會社富山房發行

名著文庫 巻廿五

94-112

三浦淨心著作
芳賀矢一校訂

慶長見聞集

帝國文庫

東京合資會社冨山房發兌

明治
39 6 29
交内

西哲の言に「肉體を養ふには食を以てし、精神を養ふには書を以てす」と云へり。就中文學は慰安の源泉、理想の靈餌にして、社會個人の文明的生活に大關係を有するもの、文學なき人は花實なき草木の如く、文學無き社會は公園なき都府に似たりといはんか。明治の洪業こゝに三十六の春を重れて、外形着々整備すと雖も、精神上の開拓惜むらくは之に伴はず、所謂佛作つて魂を入れざるの憾あり。乃ち高尚なる娯樂、健全なる文學を一般の家

庭に注入して徐に之を導かんの意、我が先達の間に急にして此の叢書を成しぬ。收むる所戯曲、小説、詩歌の純文學より史傳、紀行、隨筆、雜論に至るまで、皆愼密なる鑑査の篩を經て、一として國文學の精英ならずといふこと無し。庶幾くは社會の乾燥を醫する清爽の水たるを得んか。刻成るに臨み、校訂者に代りて聊か其の意を述ぶ。

明治癸卯三月

富山房編輯局

武陽豐島の傍に零落れたる一人の翁あり。ある夜の寢覺に思ひ出でて、我、永祿八乙丑の年生れしより此の方、慶長十九今年迄、世上の遷り變はれるとどもを數ふるに、御門御即位三代(正親町、後陽成、後水尾)、年號改元五度(永祿、元龜、天正、文祿、慶長)、武將新に備はり給ふと十代(足利義輝、義榮、義昭、織田信長、信忠、豐臣秀吉、秀次、秀頼、德川家康、秀忠を指すか)、其内、愚老五十を經ぬ、誰か之を喜ばざらん。然はあれども、是ぞと思ふ思ひ出では更に一つも無し、浮世の望み、荒增になる侍ると、誰も身は哀れなる境なるべし。其上有爲の習ひ、昨日生れしも、空しくなり、今日言葉

を交はす人、明日を知らぬ、あだなる命とは何時しかわきまふべき。世は澆季たりといへども、賢き人は、三敎を專とし給へり。かゝる目出度時に遇ひ、身の行ひもなく、徒に星霜を送り來ぬるの愚かさよ。されども、去にしをば咎めずとなれば、昔の是非を咎めて益なし。是昔なればなり。昨日は今日の昔、今日は明日の昔といへり。予が見聞きたりし由無しごとを、徒然の筆の慰に記し侍るなり。

見聞集十卷、見しは今、聞きしは今と書出して、今はむかし隆國朝臣の作つたといふ今昔物語の樣に、德川初年の江戸の雜事を寫し出した隨筆である。「江戸町瓦葺の事」の條を讀んで、慶長六年の大火の後「町中草葺故火事絶えず此序に皆板ぶきになすべし」といふ御觸のあつたことを、煉瓦土藏作のいかめしい今の東京市に比べてみれば、何人もその發達變遷の大なるに驚くであらうが、「江戸町の道、泥深き事」の條を見れば、變らぬことは今も變らぬと首肯かれる。日本橋の繁昌、吉原花街の設置、水道の事、湯な風呂の事、歌舞伎の事、勸進能の事、天下が德川の流に歸して、江戸の大都が段々と

發達してゆく有樣が目に見えるやうである。衣服風俗の昔にかはるはいふに及ばず、下帶までもむかしとは違ひ、大橋の刀市廢つて、童子あまねく手習ふに至るといふ狀態、戰國の餘風がなくなつて、次第に太平の氣象が充滿ちて來る。江戸最初の著作として、當時の風俗人情等を知るには、唯一の珍書といはねばならぬ。著者の博覽の才から、和歌連俳を引き、和漢の故事を揭げ、儒敎佛法の敎訓の意義を交へて、かりそめの巷談俚說を書いたものにも自ら一種の面白味が活動して居る。文學としてはもとより多大な作物といふことは出來ぬが、而のあたり明治の東京市を見聞して居る人に向つては、

一種無限の興味を與へるのであらう。

著者は永祿八年松永久秀が將軍義輝を弑したその年に生れ、信長秀吉の榮枯盛衰を見つくして、正保元年即ち德川三代將軍の末年に八十歲の高齡で死んだ三浦淨心といふ人である。この人在俗の名は三浦五郎左衞門尉茂正といひ、天正五年に北條氏政の家來となり、同十八年には小田原に籠城し、主家滅亡の後は江戸に來て、天海僧正に歸依したといふことである。淨心寺といふのが、その寺で、今の上野の淸水堂の邊に在つたとのこと。戰國忽忙の際に一生を過ごし、主家の滅亡を見て、佛門にはひつた人とすれば、その人物も自ら察せら

れる。

淨心の隨筆は元來三十二卷あつたが、後世の人がその中で遊女歌舞伎に關した事を抄錄して、そゝろ物語と名づけ、北條家に關したことを別にして北條五代記と名づけ、甲陽軍艦についての評論を見聞軍抄と稱へて、それ〳〵世の中に流布して居る。その殘つたものが十卷。その中から拔萃したのが、本書である。三百年間展轉傳寫したから、脫文落字等不明の所も少くはない。

明治卅九年六月

校訂者しるす

慶長見聞集卷の一

萬民の樂しびあへると見しは今、三浦の山里に年よりたる知る人あり。當年の春、江戸見物とて來りぬ。愚老に逢ひて語りけるは、「扨て〳〵目出度御時代かな。我如き土民迄も安樂に榮え、美々敷ことどもを見聞くとの有り難さよ。今が彌勒の世なるべし」といふ。實に實に土民の云出だせる詞なれども、全く私言にあるべからず。今の世の人間は、三界無安火宅を去つて、樂びを極むる國に生をなせり。佛の世界に有らずんば、何か、我も人もかく有り難き樂し

びに逢ふべきぞや。盲龜の浮木、優曇華なるべし。

吉祥寺門前の草木佛事をさへづると

見しは今。江戸吉祥寺の境地、在家離れたる古跡。此住持、洞谷禪師と申して、法臘世に超え、釋迦、達摩の變化かと沙汰せらる。ある日愚老、此方へ參詣せしに、人倫たえたる閑居、物寂びたる異地。山高くして、上求菩提を顯はし、谷深きを裝ひは下地衆生を表せり。四神相應の地を占めて、後に淺間山、日光山聳え、東に筑波山、西に富士山、箱根山、軒端に列り、和光の影も曇り無く、弘法を守護し給ひ、月眞如の光を掲げ、前には生死の海漫々として波煩惱の垢を濯げば、無始の罪障も消滅す

と覺えたり。誠に有り難き靈山、谷めぐり岩松峙つて、風常樂の聲を成し、不變の色を顯はすあたりに、植うる草木迄も、心あり顔なり。然る處に門前の傍に草木の類と見えて、辛き物ども集り學り居て、意趣爭ひをなす。愚老、是を見て、誠に勸學院の雀は、蒙求を囀るとかや。草木經を說くといへるも是なるべし。大論には、禽獸魚虫草木問答多く見えたり。末世にもかゝる奇特ありと思ひ、潛に忍び聞き居しに、先づ胡椒出でゝ申しけるは「そも、何某と申すは、事も愚かや。神農の御代に大唐四百餘州にて辛き物を集めらるゝ、我に勝るものなし。古語に胡椒の木能く多子を生ず、故に皇后の宮に慶して、是を植ゑ、

椒房、椒實とも名付け給ひぬ。扨又皇后の宮に椒を以て壁に塗る。溫暖にして、惡氣を避くると云々。其上人間の諸病を補ふ良藥とて、日本國へ渡さるゝ。辛き事にも位にも誰か及ばん。恐らく」と額に皺を打ちよせて、さも有りげなる風情なり。山椒は笑み顏にて、「異國を見ねば、そは知らず。本朝に於てをや。我等と申すは、關白殿、近衞殿を始めとし、公家、武家の面々たち、御賞翫あればこそ、りんこうじ、じやうこうじ、くわんせんなどゝいふ爵を給はるなり。善き瓢簞などに入り、夜晝御腰を離れず、御自愛淺からず。其上鞍馬の木の茅漬と古記に譽められたるは、山椒の木の皮迄も剝ぎ取つて、煮しめ味ひ給ひ

ぬ。是も山椒の威光にあらずや」と、目を見出して居たりけり。蓼、申けるやうは、「某、出生を尋ぬるに、釋尊十大御弟子の中に、智惠第一と譽められし文珠の靈草なればとて、利根草と名付け給ふ。かるが故に末に至り、弘法修行の、智者上人は、我等、利根に類似らんと、一夏九旬の其間、辛き難行爲給ひて、此蓼と云ひて專用なり」と齒を鳴らしてぞ立ちにける。薑云ふやう、「吾は是、忝くも彌勒の化草。衆生如何でか信敬せざらん。夫正月七日をば人日と云ひて、人間の始れる日なり。此日唐土、天竺、我朝の內裏に於て、七種を集め、雜炊を煮て、其かざりに、薑を一へぎ置きて、萬歳を祝ひ給ふ。故に人日七種のさい

が中に於て、一箇の生姜をこなかきすと云へり。生姜、遂に辣を改めずと云ひて、根本知の位を捨てず、萬劫を經るとても、自性變らぬ寒姜なり」と拳を握りて居たりけり。辛子は下座より轉出て、「如何に面々聞し召せ。我等と申すは、寸尺に足らず、さつふんにも外れ、不肖の身なれば、系圖、位も候はず。譬へを以て申すなり。夫天下の寶と爲給ふ黃金は、黃なる色を持來る故黃金と名付け、白き色を持つ故銀と云ふ。故に名は題號に顯るゝと古人も云へり。扨又五味を考ふるに、甘き故に甘草と名付け、苦き故に苦參、酸き故に酸棗仁、鹽はゆき故鹽硝。其上辛子は無量壽佛の靈草、西を司る。辛き中にも勝れければ、

辛子と云ふは、道理ならずや」と身長にも似せぬ口才は、布留那の辯も此やらん。然る處に米出てて申しけるは、「我此場へ出づべき物にあらねども、各の爭ひを、敎化の爲に參じたり。夫、非情の草木は無相眞如の體にして、一塵法界の心地の上に、雨露雪霜の形を現はす。去れども迷ふが故一切衆生に味ひあり。佛には味ひなし。草木に味ひ有りといへども、米には味ひなし。夫いかにと成れば、古佛砂利變して已に米と成ると說かれたり。かるが故に人間は米を菩薩と云ふ。諸穀の中に米を以て第一とす。抑、米を作り始めし事、天竺にゆうのうと云ひし人作る。又毘沙門作り始め給ふ。田の神は本地毘沙門なり。多門天王の城

は、ベィシラマナ城とて、白米の降る都なり。米を菩薩と云ふ事、種の時は、文珠菩薩、苗の時は地藏菩薩、稻の時は虛空藏菩薩、穗の時は普賢菩薩、飯の時は觀世音菩薩、一體分身、皆毘沙門天にてまします。飯は三寶とて、過去、今世、未來、三世の諸佛なり。然るに五味と名付くるは、娑婆世界の化名なり。根本に至りては、一味一法なり。萬法一位に歸す。一位は無味、無味は米に歸す。總べて口すさびに「五味と云ふ言の葉草も、さもあれや、空の米には味ひもなし」と詠みければ、彼等我慢和けて、「白露は己が姿を其儘に、紅葉に置けば紅の玉」と詠ずる古歌の心かやと、深く合點して、一處にころび遊びて、から

からと笑ふ。此聲吉祥寺に響く。門前の沙彌是を聞き、「何者ぞや。門前にて、釋迦、達摩の文句を引出だし、法令を沙汰するも所にこそよるべけれ。忝くも吉祥寺。大禪智識まします邊にて、得道がましき言句風情、見ても聞きてもくさくして、鼻持せられぬ事ぞとよ。萬法もと閑なり。自ら忙し。只平等の一理に稱へるあり。其上彼をば三世佛も不思議。歷代の祖も不可得。況や非情草木の類ひ、推參は云はすまじ。一摺に誠に赤樫の大きなる摺木を取り添へ、辛き甘きを吾未だ知らず、皆摺り合せて味はふべし」と、腕まくりして走りよれば、嵐に木の葉の散る如く、散り〳〵に成り失せぬ。

江戸町瓦ぶきの事

見しは昔。當君江戸へ御打ち入より此かた、町繁昌し、家居多く出來たり。去れども皆草葺にて燒亡繁し。然るに慶長六年霜月二日の巳の刻、駿河町かうのじょう家より火を出だす。此大燒亡に江戸町一宇も殘らず。御奉行衆仰せには、「町中草葺故火事絶えず。幸なるかな。此序に皆板葺になすべき由」御觸有りければ、町悉く板葺に作る所に、瀧山彌次兵衞と云ふ者、諸人に秀でて家を作らんと工み、海道表棟より半分瓦にて葺き、後ろ半分をば板にて葺きたり。皆人沙汰しけるは、「本町二丁目の瀧山彌次兵衞は家を半分瓦にて葺きたり、扨も珍しや奇特や」と

人褒美して、異名を半瓦彌次兵衞と云ふ。是江戸瓦葺の始めなり。古歌に、瓦の松、軒の瓦、瓦の屋などゝ詠ぜり。瓦屋を「こゝろかはらや」と心の變るに寄せて讀みたる歌あり。件の彌次兵衞が人に心かはら屋せし事古今異ならず。昔瓦始まる事、唐國にて崑吾氏と云ふ者土にて作り始めたり。扨又、王元之が黃州竹樓の記に、「黃岡の地に竹多し、大きなる者は椽の如し、竹工是を割て其節を彫りさけて用ゐて陶瓦に代ふ。比屋皆然なり。其價廉にして工省くを以てなり。此竹瓦の德、興多し。夏は急雨に宜し。瀑布の聲あり。冬は密雪に宜し。碎玉の聲あり。琴を彈くに宜し。琴調和暢せり。詩を詠ずるに宜し。詩韻清絶なり。

棊を圍むに宜し。子聲丁々然たり。投壺に宜し。矢聲錚々然たり。皆竹樓の助くる所なり」。去れば愚老大和の國を順禮せしに、宮寺などに竹瓦多く見えたり。是又黄州の竹樓を學びけるにや。然れば家康公興させらるゝ江城の殿守は五重、鉛瓦にて葺き給ふ。富士山に並び、雪の嶺に聳え、夏も雪かと見えて面白し。今は江戸町榮え皆瓦葺となる。萬づ廣大に有りて美麗なる事前代未聞。明暮皆人見る事なれば記すに及ばず。

道齋日夜雙紙を友とする事

見しは今。道齋と云ふ老人、只獨り燈し火の本に文を廣げて、見ぬ世の人こそ床しき友ならめと、明暮に慰む業ぞをかしう見

えける。若き人是を見て、「老いて死せざるは是賊すると云へる本文あり。其上老の學文、用に立たず、只朽ちたる木にして功の成らざるに比す。老來て十字見、九つ忘るべし。學は少年に有る事を」と云うて笑ふ。老人聞いて、「善き事待たん身とも思はず」と云ふ前句に、「老いたれば何にしかじの世の中に」、と能阿付けられたり。「學んで時に是を習ふ」とこそ云へるなれば、老耳には益もなし。穴勝に學問するにはあらず。文選古詩に、「生年不滿百常千歳の憂を懷く。晝短く苦夜長。何不ニ秉レ燭遊一」と云云。扨又東坡は、「夜遊びする時は五十年生きて百年生くるに同じ」と申されき。愚老七十餘才なり。終夜灯を擎げて古の賢聖と

閑談し、今生の思ひ出百五十年樂めり。「年老心閑無二外事一」、と三體詩に見えたるも面白し。「昔をも遠くなさぬは心にて」、と云ふ前句に、「しみさす文を開きてぞ見る」、と兼載付られしも又をかし。後漢の蔡邕が言葉に、「相見えん事期なし。只是書疏以て面に充つべし」と云へり。眼の相對する事眞實の友ならず。北窓古人の編、一讀三四度、只舊友に向顏の心地侍るなり。幼にして學ぶ者は日の出の光の如し。老いて學ぶ者は灯を取りて夜行くが如し。孔子も「四十、五十にして聞ゆる事なくんば是又恐るゝに足らず」と云へり。其上莊子は七十にして始めて學を好んで名を天下に聞ゆ。荀卿は五十にして始めて來りて學を好ん

で永く碩儒となる。「朝に道を聞きて夕に死すとも可なり」と申されし。去れば榮啓期と云ふ者は、人、男、老の三樂を、文に詳しく記せり。吾又三つの樂しびあり。扨又「露の命のかゝる哀れさ」、と云ふ前句に、「昔だに聞くは稀なる年の緒に」、と宗祇付けられたり。「人生七十古來稀」と云へる名言を思ひ出でゝ、杜子美が時分だに、七十に成るは稀なるに、宗祇八十に餘れるを哀れと云へる句なるべし。此人我心に同じと云ふ。人聞きて愚なる云ひ事かな。宗祇は古今稀なる連歌の名人、同じ心とは憚り少なからずやと云ふ。老人聞きて、宗祇は歌人、八十有餘まで金句を吐きて心を樂しべり。愚老一生涯、賢聖の金言を聞

きて自らが心を養へり。用ゐる氣味は變ると云へども、樂しぶ心は異ならずと云へり。

江戸の川橋に由緣有る事

見しは今。江戸に古くより細き流只一筋あり。此水、神田山岸の柳原より出づるなり。慶長十一年春、玄仍、此流の邊に來り、「青柳の梢より湧く流かな」、と發句を爲られたり。實に面白き舊跡、後々末代迄も、詩人、歌人、此流に何てか詠吟なかるべき。麴巨源が詩に、「水邊の楊柳麴塵絲、立レ馬煩レ君折二一枝一、只春風の最相惜むあり。慇懃更向二手中一吹」と云へり。此詩哀れなり。家土産にせんと一枝手折るを、春風惜しむやらん、我手の中へ念比に吹來ると作りたるを、朱子も譽めたるとかや。然れば此水、御城堀の廻りを流れて舟町へ落つる。此流に、橋五ツ渡せり。去れども皆棚橋にて名もなき橋どもなり。然れば家康公關東へ御打入以後、韓國の帝王より日本へ勅使渡る。數百人の唐人、江戸へ來りたり。是等を接待爲し給ふには、雉子に勝る好物なしとて、諸國より雉子を集め給ふ。此流の水上に鳥屋を作り、雉子を限なく入れ置きぬ。其雉子屋の邊に橋一有りけり。夫を雉子橋と名付けたり。又其下に丸木を一本渡したる橋有りければ、是を一ッ橋、丸木橋とも云ひ習はす。又其次に竹を編みて渡したる橋あり。是は簀の子橋、竹橋とも名付けたり。扨又

御城の大手の堀に橋一ツ懸りたり。餘の橋より大きなればとて、是をば大橋と名付けたり。町には舟町と四日市の間に、小き橋只一あり。是は往復の橋なり。文祿四年の夏の比、此橋本にて錢瓶を堀り出す。永樂、京錢打交りて有りしを、四日市の者ども、此錢瓶を、町の兩御代官、板倉四郎右衛門殿、彦坂小刑部殿へ捧げ申したり。夫より此橋を、錢瓶橋と名付けたり。其見し棚橋ども皆朽ち果て其跡堀川となり、今は夥しき橋懸りたり。去れば昔の棚橋は、絶えて久しく成りぬれど「名こそ流れて猶聞えけれ」の古言の葉ぞ思ひ出でにける。今は東西南北の町に大河多く見えけれども皆堀川なり。橋も限りなく出來たり。水底

深うして、此河に主ありて、人を取る事度々なり。皆人沙汰しけるは、「古き池にこそ主もあり蛇も住むと云ひ傳へたれ。是は堀川なれば、河鱸か、獺などにて有るべし」。其上「獺は老いて河童と成りて人を取ると古記にも見えたり」、と云へば、傍へなる人云ふ、「今江戸の橋、廣大にして長く、皆板橋に欄杆、所々に銅の擬寶珠ありて、見よしと云へども、橋の名を聞けば、稱へ卑しく、田舍びて、をかしかりき。古へより聞き傳へし名所の橋多し。唐橋は山城にあり。見橋、内橋、雲の梯橋は禁中の事とかや。古歌に、『若芽かる春にもなれば鶯の木傳ひ渡る天の橋立』、と詠ぜり。宇治橋、瀬田ノ長橋、廣橋、細橋など云ふこ

そ、聞きも稱へもやさしき名なれと。老人聞きて、「いや、江戸の橋の名な笑ひ給ひそ。昔の橋の名も、一ッ橋、丸木橋、竹橋、中橋、堀江橋、皆是名所にて歌に讀みたり。此橋の名、今江戸の都に出來たれば、詩人、歌人、何どか此橋に詠吟なかるべき。其上古へ由來あるにや橋の異名多し。密語橋は、備後、「くまのなる音無川に渡さばや密語の橋忍び〳〵に」、形橋、作州、「勝間田の形の橋のいかねども浮名は猶や世に留まるらん」、思惑橋、奥州、「踏まば惜し紅葉の錦打ち敷きて人も通はぬ思惑の橋」、轟の橋、近江、「霰降る玉ゆり据ゑて見るばかり暫しな踏みそ轟の橋」、淺水橋、越中、「淺水の橋の忍び路渡れども轟ろ〳〵と鳴ぞ

佗びしき」、千束橋、近江、「君が代は千束の橋を幾返り運ぶ御調の數もしられず」、久米地橋、信濃、「埋木は中虫食むと云ふなれば久米地の橋は心して往け」、朽木橋、奥州「ふみだにも通はぬ」と詠ぜり。橋の異名盡し難し。去ば橋の德義をば、佛法、世法に多く記されたり。橋は勢至菩薩の尊影を表し給へるとなれば、衆生何でか仰がざるべき。法華經七の卷に「如渡得船」とあり。「諸々の法門を説給ふも、衆生迷倒の大川を越て、本分の岸に到らしめんが爲の船橋なり」と説けり。實に〳〵水波の難を逃れ、萬民、富める世を素直に渡るは、是橋の明德なり。此江戸川に橋なくんば、幾千萬人川の水屑と成りて、徒に命を

失はん事必定、有りがたき橋の威德なり。然れば先年江戸大普請の時分、日本國の人集りて懸けたる橋あり、是を日本橋と名付けたり。又其川裾に、空へ高き橋あり、是を天竺橋と云ふ。是等の橋は御代目出度時分、新規に出來たるにより、何れも名高き橋どもなり。

東海にて魚貝取盡す事

見しは今。相模、安房、上總、下總、武藏、此五ケ國の中に大きなる入海あり。諸國の海を廻る大魚ども、此入海を能き住所と知りて集ふと云へども、關東の海士、取る事を知らず。磯邊の魚を、小網、釣を垂れ取る計なり。然る處に、今、武州江戸

繁昌ゆゑ、西國の海士悉く關東へ來り、此魚を見て、願ふに幸ひかなと、地獄網と云ふ大網を作り、網の兩の端に二人して持つ程の石を二ツくゝり付け、是を千貫石と名付け、二筋網を付け、長さ三尺程幅二三寸の木を、ふりと名付けて、大網の所々に千も二千も付くる。此槇と云ふ木、魚の目に光ると云ふ。早舟一艘に水手六人宛七艘に取乘り、大海へ出て網をかけ、兩方へ三艘宛引き分けて大網を引く。一艘は、ことり舟と名付け、網本に在りて左右の網の差引する。此網の内にある大魚小魚、一ツも外へ漏るゝ事なし。海底の鱗屑迄も悉く引き上ぐる。扨又、海底にある貝を捕らんとて、網を海へ下し、大網を引据ゑて舟の

内に捲き車を仕付け、碇を打ちて網を引きぬれば、砂三尺底にある諸々の貝どもを熊手にて引き落す、天地開闢より、關東にて見も聞きもせぬ、海底の大魚、砂底の貝を取り上ぐる。去る程に四時を待ちて、波の上、砂の上に出づる魚貝ども、今は時を知らず、常に服しぬれば、江戸にて初魚初貝の沙汰なし。早廿四五年この方、此地獄網にて、取り盡しぬれば、今は十の物一ッもなし。「數苦洿池に入らずんば、魚鼈勝て食ふべからず」とは孟子の言葉なり、其上淮南子に、「流を絶ッて漁る時は、明年に魚なし」と云へるも思ひ出ててうたてさよ。諸々の魚の中にも取り分け、鯛、鱸こそ床しけれ。玉葉に、「暮るゝまに鱸釣るらし

夕鹽の干潟の浦に海士の袖見ゆ」、と爲家卿詠ぜり。扨又、「行く春を境の浦の櫻鯛あかぬ形見に今日や引らん」、と詠めり。櫻鯛と名付け、春に用ひ給へるもいと柔しかりき。鰹、鱏は毎年夏に至つて西海より東海へ來る。伊豆、相模、安房の海に釣り上ぐる初鰹賞翫なり。小田原北條家の時代、關東弓矢ありて毎日戰ひ止む事なし。鰹は勝負に勝つ魚とて、古き文にも記し、先例ありと云ひて、侍衆、門出の酒肴には鰹を專と用ひ給ひぬ。鱏は味ひ善らずとて、地下の者も食はず。侍衆は目にも見給はず、其上しびと呼ぶ聲の響、死日と聞えて不吉なりとて、祝儀などには沙汰せず。然る間、海士、鱏を釣りては、鹽引にして

束ね置く所に、此魚、肉深きに依りて、頓て虫湧き出づる。其虫自ら肉を食ひ、肉を食ひ盡して後は死に、かたまつて又本の肉となる。異香邊りを拂つて深し。此魚を、信濃、上野、下野の山國へ、商人持ち行き賣買ず。此等の國の人賞翫他事なし。去れば鱒釣ると古歌に多く詠みたり。藤江の浦、藤井の浦、紀の海に詠ぜり。此國の浦里の人、鱒賞翫と知られたり。庭訓往來に生物には、鯛鱸は最前に譽めて書出し、扨又鹽肴には、鮎の白干、鱒の黒作りと記せり。黒作りの事知らず。註にもあらず、覺束なし。然るに今の時代に至りて、鱒は鰹よりも滋味勝りたりとて皆人賞翫なり。下萬民猶然なり。人の好みも時

代に依りて變ると見えたり。然れば一季を待つて來る魚さへ、關東の海には暫しも留まらずして去り行きぬ。今より末の世東海に生魚貝有るべからず。遠國より持ち參る鹽魚、鹽貝をこそ食はめ。去れども川魚は昔に變らず。若鮎、初鮭を皆人賞翫し給ふ。關東に多し。鮎は玉川、鮭は絹川にあり。「建久五年甲寅正月十四日、佐々木三郎盛綱、生鮭を二つ、頼朝公へ進上す。越後の國の所領の土産」と云々。「頼朝公、殊にもて御自愛、一つは唯今伺候の輩に施さしめ給ふ」、と古記に見えたり。然るに初鮭は、十年以前まで、冬の末より取りしが、今は秋の始めにあり。近年初鮭一喉は、金五十兩、卅兩の價ひすれ、古の例へ

にこそ、「一字千金」、「春宵一刻價千金」などゝあれ。今は初鰹一喉價千金とや云はん。是も大海の生魚なきが故なり。「西海の海士賢きは、關東萬民の禍ひなり」、と我云へば、老人聞きて、「地獄網に付きて思ひ出せり。華嚴經に、『佛敎の網を張り、法界の海を渡して、人天の魚を救ひ、涅槃の岸に置く』、と說き給ひて、三界の群類を、誓ひの網にて救はんとの方便なるに、今世地獄網にて、海中の鱗屑までも取り盡す事、外道の成せる業なるべし。扨又弓、獵と云ふ事あり。弓はいぐるみと讀む。矢の先に網を付けて、魚を射くるむ。獵は狩する事なり。論語に『釣すれども網せず。弓すとも宿を射ず』と云ふに、縱ひ釣を

垂れて魚を取るとも大網を建て切て、有る限り取る事を戒め給へり。弓するとは弓射る事なり。空を飛びなんとするをば射殺すとも、宿鳥を射るは情なき由なり。此心を、『廣き網には魚も逃れず』と云ふ前句に、『射る矢をも寢ぬる鳥には心せよ』、と宗祇付けられたり。昔、或人干つまりたる池水に住める魚を取りて、大海へ放ちける故長者と成りたり。少さき形を請けたる物なりとも、命を惜む事大山より重し。本草綱目に云ふ。『人魚あり、形人に似て腹に四足赤ひれの如し、善く癪を治す、海、山川にも、人魚の網に懸る、人恐れて食はず』と云々、佛は物の命を殺す事、十惡五逆の始に戒め給ふ。古歌に、『報ゆべき罪の種を

や結ぶらん海士の所業は網の目ごとに』、と詠めり、恐ろしき大殺生、言葉に絶えたり。」

慶長見聞集卷の二

平五三郎形儀異樣の事

見しは今。江戸繁昌にて、屋作り家風尋常に、萬づ美々しき事前代未聞なれば、田舍人、見物に來り群集を爲す。爰に室町の棚に、平五三郎と云ひて、心横道なる人あり。此者つくづく思ひけるは、今江戸の町、我人の風體衣裳いちじるしければ、田舍者愧らいて、邊へ寄り付きがたし。我れ虚癡呆を作り、田舍者を近付けて、物を賣らんと工みて、髮鬚髯むさ〳〵と生へさせ紙頭巾を目の上まで引き被り、つゞりたる古小袖の襟を深く折

り て、衣紋引き繕ひ、木綿袴の汚れたるを脛高に着なし、手に長珠數を爪ぐり、口に題目を稱へ、見せ棚に打ちかゝり虚ね眠して居たり。知る人達是を見て、「古き文に『官祿をよくする者は其詞飾る。忠義を思ふ者は其詞直なり』と云へるは、是にて思ひ知られたり。平五三郎が作り癡呆の有樣、彼れ見よ」と、皆人指さし唇を動かさゞるはなかりけり。然るに田舍人、江戸を見物し歸るさ、在所への土産物を買はんとて、室町を見廻りけるに、唐綾の狂文、唐衣、朽葉地、紫、緞子、綸子、金襴、錦、色々種々の美麗なる物どもを積み重ね、分限さうなる人達の並び居て、「何をか召す。御用か」と問ふ、田舍者の事なれば、恥

し顔にて、物買はんと云ひ出さん事は思ひもよらず。見世の方をば皆にかけ、腰をくゞめ、「御免候へ〳〵」と、顫ひ〳〵棚の前を通り行く計にて立留まり物買ふべき所なし。見れば是なる棚に、長珠數を爪ぐり、後世願ひと相見えてまらうど一人あり。無骨なる姿風情は我等が里の、生地なし左衞門四郎に能く似たり。此棚にて物を買はでは有べきかと思ひ、「是なる着る物娘に似合たり。價は何程ぞ〳〵」と問へども、此者、時々目を開き耳を聳だて、あり〳〵と云ふて口を開き、「我は耳が遠し」と云ふて又ねぶり、口に題目を稱ふ。田舍者是を見て、江戸の都にも此る姿無骨にて癡呆者ありけるぞやと思ひ、「喃棚主殿、是なる着

る者、錢三貫に賣しめ〳〵」と耳の方へ口を寄せて呼はる、眠り男是を聞き、此小袖一貫にも疾く賣りたし、扨三貫に賣らんと云ふならば、田舍者、乞ひ損なひと思ひて逃ぐべし「何々此着る物二貫に買ひ度とや、安く候いや〳〵」と面を振り、又ゐねぶり題目を唱ふ。田舍者是を見て我三貫と云ひしを、二貫と云ふは、誠に耳が利かざるや、たぶらかさばやと思ひ、「扨々御主は慾徳にも取合ず、後世の事のみ思ひ給ふ有がたき人なり。我里の左衞門四郎と云ふ人に善く似させ給へり、誠の佛よ」と云ふ。其時眠り男目を開き莞爾と笑ひ打首肯き「其事よ〳〵、今は皆夢の戯れ、我人明日をも知らぬ浮世なり。汝の里の、左衞

門四郎殿は、御經宗にて御座するか。あら有がたや。『正直捨方便』と一の卷に說給ふ。譬ひ御經宗に有らずとも、神は正直の頭に宿り給ふ。皆人の物賣るを見るに、御主達のやうなる山家の人には、直を高く云ひかけ、一貫の着る物を、二貫三貫に大利を取りて賣る。恐ろしや。神佛の戒めをも思はず、人をたばかる科により、地獄にて鬼に責めらるゝ事を知らず。吾は平五三郎と云ひて、江戸にて隱れなき後世願ひの正直者なり。一貫の賣物に、錢五十の利あれば疾く賣り、二貫の小袖に、錢百文の利あれば早く賣り、其日の口を養ふ。兎角此口ある故に、此る少しの利錢を、人前より取ると思へば、一日も早く、靈山淨

土へ參りたしと願ふ計なり。唯々正直正路なる人こそ神なれ、佛なれ。何々此着る物御主の娘子似合たるとや。我も娘を持ちたり。誰とても子には着せて見たき物ぞ。御經御本尊、御題曼陀羅、此じゆずぞ〳〵、代物二貫は安けれども、御主眞人さうなる人なれば、後までの知る人に成るべし。人には逢ふて見よ。馬には乘りて見よとなり。何ぞまれ用あらば、又も尋ね來り給へ。其知るべに、此着る物二貫文に負け候ぞよ」、と云ふて賣りたり恐ろしき平五三郎がたばかり、云ふに絶えたり。去れば「人の心の好惡甚だ常ならず」と白氏文集に見えたり。白頭新たなるがごとし。蓋を傾けて古へのごとし。如何んとなれば知ると知

らざるとなり。是雛陽が傳思ひ知られたり。人は巧みにして詐はらんより、拙なうして誠あるにはしかじ。扨又虎斑は見安く、人斑は見難しとなり。知らぬ人には心許し給ふべからず。

久齋天神詣の事　付　宗圓入道事

見しは今。江戸通町に、久齋と云ふ針たて醫師の有りしが、去廿五日、湯島の天神へ參詣せしに、神田町にて草履の緒を踏み切り、爲方なく四方を見れば、見世棚に藁草履一足下げ置きたり此棚へ立寄り、「我天神へ參る者なるが。草履の緒を踏み切り、中途にて爲方なし。此草履買ん。去りながら、代物持合せず。借し給はぬか」と云へば、草履の主、此體を見て、「藁草履一足

安き價なり、其方に與ふる。穿きて天神へ參り給へ」と云ふ。知らぬ者にやさしき志を感じ、穿きて天神へ參りたり。歸るさに是なる町を見れば爰かしこの家より、けてん顏にて人走り出て是なる家に集りて「扨も〳〵俄事、笑止や。痛はしの事や」と云ふて啼聲する。久齋如何なる事ぞと思ひ、立止まり能く見れば、先程藁草履貰ひし家也。「是は何事ぞ。問はばやと思ひ、立寄り、「此家に如何なる事の有りけるぞや」と問へば、「此家主宗圓入道、十四五の獨り息子の有りつるが、俄に喉痺出來、喉つまり、半時の間に死にたり」と云ふ。久齋人中を分入り、「如何にや亭主。我先程天神へ參るとて藁草履貰ひし者。針たて醫者

なり。喉痺の煩ひにて死にたるとや。我針をたて、子息の命を助くべし」と云ふ。親是を聞きて喜び、「頼み申す。早々」と云ふ。久齋巾着より針取出し、一針さしければ、此者息を吐き出だし甦へりたり。皆々是を見て、「扨も不思議の出合にて命助りたる事。天神の御利生かや。又は生藥師の現來か」と、思ひ〳〵に沙汰する處に、傍へなる人申されけるは、此る奇特なる仕合せ、何れ佛神の御惠にて有るべし。去れば月は四州を照し給ふと云へども、分ては只慈悲正直の頭に宿り給ひぬ。扨又「人を利する者は天必是に幸す。人を賊する者は天必是が爲めに妖ひす」と云へり。慈悲ある人は善く天道に叶ひ自然に感を催せ

り。列女傳に「陰德有る者は陽是に報ゆ、德は不祥に勝ち百禍を除く」と云々。かるが故に陰德有る者は必陽報あり。楚の孫叔敖は兩頭の蛇を見て殺し埋みたりしも、陰德あるに依つて果して令尹の官に登り、後は、楚國の政を行ひしも、陽報の理に叶ひたり。扨又、周の文王の時、一國の民畔を讓る事あり。「果敢なや今の國の爭ひ」、と云ふ前句に、「古への小田の畔をも讓る世に」と、行助付け給ひぬ。文王、一人の德、諸國に遍ねきが故、萬人やさしき道を學べり。古き言葉に、「國正しき時は天心從ふ、官清き時は民自ら安し」と云へり。今の御時代、君の御心無欲にまし〳〵て、賞罰の間に私の御心なきがゆゑに。萬民是に愧ぢ、欲心薄くやさしき心なり。此宗圓は藁草履一足、僅の志たりと云へども、誠の慈悲心忽ち通じ、現當なる惠みに預る事、是天地の神明の感ずる處にあらずや。

一里塚築き給ふ事

見しは今。國治り土民までも安樂たり。世澆季に及ぶと云へども、君仁德を施し給ふに因りて、佛法、王法共に繁昌す。有りがたき御時代也。然れば日本五畿七道は、人王三十二代、用明天皇の御宇に定まり、六十六ケ國に分けらるゝ事は、四十二代、文武天皇の御宇なり。道をば、四十五代、聖武天皇の御宇に、行基菩薩、六町一里に積りて、王城より、陸奥、東濱に至りて、

三千五百七十七里に極め、又長門、西濱に至りて、一千五百七十八里に、慥に圖書に記し置給ふと雖も、其境定ならず。是に依つて、當君の御時代に、一里塚を築くべき由の仰せ出でたり。去れば、日本橋は、慶長八癸卯の年、江戸町割の時節、新らしく出來たる橋なり。此橋の名を人間は嘗て以て名付けず。天より降りけん。地よりや出でけん。諸人一同に、日本橋と呼びぬる事稀代の不思議と沙汰せり。然るに武州は、凡そ日本東西の中國に當れりと御諚ありて、江城日本橋を、一里塚の本と定め、三十六町を、道一里に積り、是より東の果、西の果、五畿七道、殘る所なく、一里塚を築かせ給ふ。年久しく治ならず、諸國亂

れ、邊土遠境の道狹くなる所に、曲りたる處をば見計らひ、直につけ、道を廣げ、牛馬の蹄の勞せざる樣に石を除き、大道の兩邊に松杉を植ゑ、小河をば悉く橋を懸け、大河をば舟橋を渡し、日本國中、民間往復の便りに供へ給ふ事、慶長九年なり。萬人喜悅の思ひを含み、萬歲を願ひあへり。有がたき將軍國王の深恩、末代までも何で是を仰ふがざらん。

江戸を都と云ひ習はす事

見しは今。天下治り、將軍國王、武州江城に御座しまし、目出度御世の上なり。故に、御門より、慶賀を述べ給ひ、毎年勅使、怠る事なし。慶長十一年、近衞殿、江戸へ御下りの時節、「ねが

はくは都にまだき花ぞ見ん。今日來る方の春に行身は」、九條殿、江戸に御座し、立春に「あひにあひぬ。時ぞ東の旅衣。春を迎ふる君が恵みに」、と詠じ給ふ。此外、月卿雲客殿上人、東國の山を越え海を渡り、年毎に江戸に下向ありて、將軍を尊敬し給ふ。「海山も吾をば知るや。東路に馴れて往來の近き年々」、と三條中宮大夫讀み給ひぬ。然る間江戸を都と云ならはせり。眞齋と云ふ人申されけるは、「天に二ツの日なし。地に二人の王なし。其上内裏を造進せず、朝政事なくして、都と云はんはひが事なり。天下に王も一人、都も一つならでは有べからず」と云ふ。此義尤理りなり。然りと云べども、天下を守護し、將軍國王

まします所何どか都と云はざらん。去ば鎌倉は、頼朝公、治承四年の冬の比より、取立てられし所なり。古歌に、「鎌倉や鎌倉山に鶴が岡柳の都諸越の里」、と詠ぜり。昔將軍頼朝公在世の時、二ケの都と號し、鎌倉を都と云ひ習はせし事、今の世に用ひざれども、鎌倉の人、隣郡、隣郷へ行きては、田舍へ行きて候と云ふ。是云ひ傳へたる所の言葉、鎌倉の人は今に於て云へり。扨又東鑑の文書を見しに、「萬づ鎌倉よりの御法度以下皆田舍へ觸遣すべし」とあり、其上我朝は、天竺、震旦の古き跡を尋ねて、其例を用ひ給へり。「世界に王の數、一萬七千一十八王あり」と云々。「其かみ三皇、五帝、世を治め給ふ事、天の道に叶ひ、人民

の政道を行へり。是天より與ふる所の一人なるが故に、地に二人の王なし」と、孟子に見えたり。周の文王、代を治め、赧王まで十六代相續せしかども、其内にも、七御門ありて、戰國七雄あり。帝の末子諸國に別れ、自立し國王と號し、其國々の民を撫で、政道ありし事、春秋に委しく記せり。項羽、高祖の戰ひ史記にあり。五常も他國より始まれり。我朝には、聖德太子の御時より是を學び給へり。「守るにひとの國の苦しさ」、と云ふ前句に、「昔日は五ッのおきて有らぬ世に」、と紹巴付けられたり。先聖孔子、先師顏回の御顏、大學寮にまします。供具を供へ、詩を作り、春秋の禮贊を奉る。「唐人の賢き顏を寫し置きて

聖の時と今日祭るかな」、と詠ぜり。去れば大國には、御門數多なるゆゑ、都も多しと聞えたり。然ば過去に、法性の都あり。未來に、無爲の都あり。天上に、寂光の都あり。水下に、龍の宮古あり、此の如く、過去、未來、天上、水底までも都あり。かるが故に、現在にも都あり。是一向樂しぶ所、繁昌の地を、都とは云へるなるべし。扨又山野にも都あり。宗砌の發句に、「秋の野は千種の花の都かな」、鄙の都と歌に讀みたるは國府なり。又國の政する所を、田舍の都と記せり。又人々に就て都あり。野の末山の奥にも、住めば都、住まざれば都も旅なり。然れば、今、江戸より京の人を召す。又御用を仰せ付けらるゝ、其御請、返

答にも、「御諚恐まつて罷り登るべく候」、「御用調へ上せ候」と言上する。又京の人、江戸へ着いへては、「昨日罷り上り候」、「今日登り候」、と申さるゝや。此く京の人を始め、諸國より江城へ上ると云へば、江戸は都に有らずや。萬事に隨て時々に進退あるべしとこそ古人も申されしか。其上、尚書に、「周公基を始め、東國の洛に新邑を作る」と云々。然る時は、東國の洛、古今、漢和に、其例しあり。誠に有り難き將軍、國王の御時代。天下の安樂思ひ知られたり。

慶長見聞集卷の三

古無僧母の爲めに修行の事

聞しは今。或人語りけるは、古無僧一人、尺八を吹き、我が門に立ちたり。一錢取らする所に、古無僧云ふ。「我は門ごとに順廻り、母を尋ぬる」と云ふ。「不審なり。如何なる人ぞ」と問へば、古無僧答へて、「生國は山城の國の者なり。我れ奉公し、主人の供して、豊後の國に行きけるに、親は、身の爲す業もなく、世に住佗びて、東の方に栖求めんと、父母伴ひ下りぬ。二歳が程親の行方を聞かず。明暮戀しく思へども、心に任せぬ事にて、

相過ぐる所に、三年已前の春、知る人語りけるは、「當年主人の供して江戸へ下り、主人より去る所へ、急用の使ひに行きけるに、其方母人、路次にてはたと行き逢うたり。母、袖に取付き、『古へ我が子の新八と、友達なれば、子に逢ふ心地こそすれ』、と一向に愁歎す。『其方子の新八は、豐後の國にあり、息災にて奉公す。去れども父母の行方を知らずと云うて、明暮歎く』と云へば母云ふ、「一年の秋、夫病死して別れたり。頼む方なく、いとゞ我が子の行方のなつかしさに、乞食して上方へ登る所に、箱根の關にて、女を通さずと云へば、爲方なく、倦れ果て、生きて苦み歎かんより、谷へ身を投げ、死なんと思ひつるが、命の

有らば又もや子に逢はんと、箱根山を下り、又江戸へ歸り、人に奉公し命つなぐ』と泣く。人々見て、痛はしさに、共に涙を流しけり。『我れ主人の爲め、急用の爲めに使に行く。返事遲々せば、腹を切り、追ひ失はるゝか。身安かるまじ。殘り多けれども、又こそ逢はめ」と云へば、母は、『扨も情なし』とて、暫し袖に縋り放すまじと、人目もわかず泣き悲しめば、進退ならず、迷惑す。町海道の事なれば、通る者ども、何事かあると立ち止まり、兩人を中に取りまいて、群集する事市の如し。斯あり、て時刻移るの悲しさに、取付いたる袂を引切りて、あへなくも奔り過ぎ、跡の事は知らず。我れ奉公の身、止事なき仕合に

て、母人の在所をも聞かず。其方に語るも面目なし」と云ふ、我聞きて、父の事は嘆きてもかひ有るまじ。生たる母の在所を尋ねばやと思ひ、主人へ侘びければ、情深き人にて、暇を出されたり。即刻、豐後の國を立つて急ぐ程に、廿日と云ふに江戸へ付きぬ。母の行方知り難ければ、小さき板に書き付け、『我生國、山城の國、愛宕の郡、小澤の里、名は新八、幼名は犬法師、母を尋ぬる』と書きて、江戸海道の橋詰めごとに札を立て置き、我は尺八を吹き習ひ、古無僧と成りて、江戸町の門毎に立ち廻尋ぬる事、早三年になると雖も、母の在所を知らず」と、涙を流す。是を聞きて、男女皆哀れを催し、袖を濡したり。

傍へなる人云はく、「是に付いて哀れなる事思ひ出せり。昔建仁元年三月八日、鎌倉將軍頼家公、比企判官能員が宅に入御し給ふ。庭樹の花盛りなるの間、兼て案内を申すの故なり。爰に京都より下向の舞女有りて、微妙と號す。盃酌の間、是を召し出され、歌舞の曲を盡す。左金吾しきりに是を感じ給ふ。廷尉申して云ふ。『此舞女愁訴の有るに依て、山河も凌ぎ參向す』と申す、金吾聞し召し、其旨やがて直に尋ねしめ給ふの所に、彼の女、落涙數行にして、左右なく言葉を出さず。尋問度々に及ぶの間、申し上げて曰く、『建久年中、父右兵衛尉爲成、佞人の讒言に依りて、官人の爲め禁獄せられ、然して奥州えびすに給はら

ん爲に、是を放ち遣さる。將軍家の雜色、請取り申し下向し終んぬ。母は愁歎堪へず、孤獨の怨みに沈む。漸く長大の今、戀慕の切なる故、父の存亡を知らんが爲に、始めて當道をなしつ。東路に赴く』と申す。將軍聞し召し、『不便の次第なり』と感じ給ふ。聞く輩悉もて悲涙を催す。奥州へ人を遣し、彼の者尋ぬべき由仰せ出だされし也。其後に尼御臺所、金吾の御所へ入御し給ふ。舞女を召され、其藝を見給ふの後、親を戀ふる志を感ぜしめ給ひ、奥州よりの飛脚歸參する程は、尼御臺に候ずべき由仰せ有りて則ち還御の御供す。而ば奥州に遣はされし雜色の男、八月五日歸參す。舞女が父爲成亡の由を申す。舞女

聞て悶絶す。同十五日舞女は、榮西律師の禪房に於て出家を遂ぐ。持蓮と改號す。遍へに父を弔はん爲なり。尼御臺、御哀憐の餘り、居所を深澤の里の邊りに於て給はる。常に御持佛堂の砌に參るべき由仰せ含めらるゝ。彼の女、日比古郡左衞門尉保忠と密通し、比翼連理の契を爲す所に、保忠は、甲斐の國に至り、彼の者の歸り來るを待たず出家す。悲歎に堪へざるが故なりと。皆人感涙を流したり。然るに保忠、甲斐より來り、舞女出家の由を聞き驚き、遺恨止む事なくて、彼の禪門に入り、舞女を落髮せしむる僧等を悉く打擲す。是に付いて仔細どもあり略しぬ。扨又「其方父は死に母去々年まで存命なるとや。孝

子の志をば、天地も感じ、佛神も哀れみ給ふ。などか母人に廻り逢ひ給はざらん」と慰めぬ。而は古無僧、三年、町を尋ぬれども母の行方なし。大名衆の屋形を尋ぬる所に、或屋形の門外にて尺八を吹きたり。門番「乞食は門内へ入るべからず。御法度なりと」云ふ。古無僧「我は母を尋ぬる者なり」と云々の事を語る。番の者聞きて「母を尋ぬる志哀れなり。不便なり。此屋形の内をば、我れ尋ぬて取らすべし。暫らく待てよと」云ひて、屋内を走り巡つて聞く所に、或下女聞きて「夫は誠か、年頃はいか程。名は何と云ふぞ」男答へて「年は廿歳計、名は新八幼名は犬法師と云ふ」。女聞きて、「喃それこそ我子よ」と云ひて、

愴てふためき、門外へ馳け出づる有樣、狂人の如く、子を一目見て、「やれ法師よ」と走りよりて抱きつき、「是は夢かや、現つかや。もし覺めなば如何せん」と泣く。子は父の事を云ひ出し、「哀れ、兩親視るならば、何が嬉しかるべき」と、ともに泣く計りなり。屋形の男女集りて袖を濡らさぬはなし。主人聞いて、女に暇を取らせ、剩さへ豐後までの路錢を添へて出だす。親子喜び伴ひ、本國へ歸りけり。孝子の志淺からず。佛神の御引合せにやと、皆人涙を催せり。

江戸町にて無盡流行る事

聞しは今。關西大坂、堺にての流行者、關東江戸まで流行りし

は、賴母子無盡と名付けて、貧なる者が、有る程なる者を談らひ、金を持ち寄り坐中へ出だし、百兩も二百兩も積み置き、皆入札を入れ是を買ひとる。有德なる者は貧なる者に高う買はせ、毎月金の利益を取るを悅ひ、貧なる者は持たぬ金を得る心地して歡ぶ。流行物なれば何なる人も、五十口三十口無盡に入り、扨又無盡好む人達は、一人して百口も二百口もするなり。江戸本石町四丁目の乳牛彥右衞門と云ふ人は、二百廿口に入りて、無盡中を驅け巡り、賣買に隙なしと、愚老に物語せられし。何れの人も、此の如く成るに依りて、町騷がしき事是希代の例なり。老人是を見て申されけるは、「己れが有を有にして、他

の有を貪らず。是先賢が戒なり。夫無盡と云ふ事は、貪なる者の工み出せる惡事なれば、矛盾と名付けたりしを、此妖孽好む者が、無盡と文字を書換へたり。韓非子に、『矛楯の二字は、ほこたてと續く、矛は人を刺さんとす。楯は人を防がんとす。故に相違し、人と中惡しき事を矛盾と云ふ』と註せり。是により無盡のある年は必ず國騷がしき事あり。好事も無きには如じとこそ云へ。增して此事吉事なるべしとも覺えず」と云ふ。若き人達是を聞きて嘲笑ひし處に、當春の比より風聞せしは、大坂にまします秀賴公、矛盾を工み給ふ。是により、大坂へ御陣立て有るべしと、爰彼處にて囁きけり。無盡買ひたる人は是を

聞き、夫人間の私語雷の如しとなり。「好事門を出てず。惡事千里を走る」と云へり。是こそ誠に國の亂れなるべけれ。我々がはかりごと、願ふに幸ありとて毎月無盡の寄合へ出あはず。賣たる人は此金を失はん事を嘆き悲ぶ。此等の人、財を求むる時も煩ひ、守る時も苦しむ。失ひぬれば愈々愁ふ。樂しびと思へるは苦を樂とせり。「財も不足と思へるは貧しき人にも勝れたり。常に足るを知るの人は、地の上に臥すとも安樂なり。足るを知らざるの者は、天堂に處すれども心に叶はず。小欲の人は貧と雖も富めり。多欲の人は富むと雖も貧し」と云へり。誠に財多ければ、身を害すと見る。古人の言葉思ひ知られたり。然

れば大國の比量を聞くに、「吳王劍客を好めば、百姓に瘢瘡多し。楚王細腰を好めば宮中に餓死あり。越王勇を好めば。此皆危き所に死を爭ふ。皆是所詮なき事好む」と云ひ傳へり、扨又當年、無盡流行りし事、偏へに、秀頼公、矛盾の基、世の中民百姓の哀微すべき前表あり。是のみならず、世間になんなき事流行るは、惡事出來の本なるべし。

關東衣服昔に替る事

見しは昔。關東にての體裁。愚老若き頃までは、諸人の衣裳、木綿布子なり。麻は絹に似たればとて、麻布を色々に染め、わたを入れ、おひへと云うて上着にせしなり。布は出所多し。木

曾の麻布は信濃にて織り、手作りは武藏に詠めり。奥布、信夫文字摺は忍郡にて織る。氣布の細布は油中折に、件の布は兎の毛にて織ると云々。此說樣々に記せり。扨又我若き頃、三浦に六十ばかりの翁あり。語りしは、大永元年の春、武藏の國熊ケ谷の市に立ちしに、西國の者木綿種を持來りて賣買す。是を調法の者かなと、買ひとりて植ゑつれば生ひたり。皆人是を見て、次の年又西國の者持ち來るを、三浦の者共、熊ケ谷の市に出て買ひ取り、植ゑぬれば、四五年の內三浦に木綿多し。三浦木綿と號し諸國に賞翫す。夫より此方關東にて諸人木綿を着ると語る。然る時は木綿、關東に出來始まること、大永元年より慶

長十九年、當年までは九十四年此方と知られたり。愚老若き頃、諸人の袴木綿なり。今の時代は麻なり。扨又此頃絹の裏付き袴流行りぬ。凡そ袴の始まる事、天竺大羅國と云ふ國、波斯匿王と申す王御座します。或る時美はしき女房餘所より來れり。帝王近附けて后の思を爲し給ふ。彼の后懷胎し、頓て御產を解き給ふ。取り上げ見奉れば、王子にて渡らせ給ふ。御門御歡び限りなし。彼の后頻りに暇を乞ひ給ふと云へども、出し給はず。后宣はく「我は此國の傍らに、黑鹿山と云ふ山あり、其山の主鹿の王なり。我人間に便り、佛性を得べき爲めに、大王に契りを込め奉るなり。我が本望是までなり。一人の王子出來させ給

へば、身の幸是に過ぎじと思ひ侍れば暇申す。去らば」とて、搔き消す如くに失せにけり。此王子溫和しく成らせ給ひ、隨つて、諸藝勝れ、弓馬の道殊に達し給ふ。此王子の左の足、一向班なり。さながら鹿の毛を見るごとし。是併し鹿の腹に宿らせ給ふ御しるしなり。扨こそ班足王とは名付けけれ。此足見苦しとて、袴と云ふ事始まりぬ。又馬などに乘り給ふには、行縢と云ふ事を、仕出しめされたり。此時より起る。鹿の夏毛などの皮にてもするあり。扨又或る文に、昔綿を多く入れて、夜の者として夜着にする、是を、をひへとも、北の者とも名付けたり。故如何なれば裏に越後をするによりてなり。冬は北より來る、越後

の國北なり。其緣を取りて、おひへとも北の者とも名付けたり。又異名を、布子とも綿入れとも云ふなり。此詞皆公家より出でたり。信濃布は細く白し。雪にて晒す布なり。美濃布は上品と云うて芹河と云ふ所より出づる。內裡へ奉り、天子の御座、欄干にある幕布也。九尋有りと云々。是は九節進と云ふ物語に記せり。今やんごとなき御方は、布子、おひへの沙汰は知ろし召されず。去れば、安房の國と相模は、年久しく弓矢を取り、遂に和平の義なし。天正十八年七月、小田原沒落以後、天下一統と成る。我れ房州へ行きたりけるに、木綿布を、見せ棚に積み重ね置きたり。是を買はんと、取りて見れば、横狹く竪長し是

は見始め。何と裁ち縫ふと問へば、脇入れして縫ふと云ふ。見れば、實にも房州一國の人、皆脇入れして着たり。是等の事、詮なき義なれども、近き年中、世上移り替る事、今の若き衆知らざる故記し侍る。昔もさる事やありけん。狹布の細布は、はたばり狹し。尋短かく、古歌に、「錦木は千束に成りぬ。陸奥の狹布の細布胷合ずして」と詠めり。又あし絹は、ひろさたらずと詠ぜり。安達絹、常陸袖、加賀絹、伊豆の八丈絹など、大名衆、其外にも有德なる人達着給ひぬ。綾、緞子、練羽二重などの、京染着たるを見ては、此人は京氣の者を着たりと云うて譽め羨みしなり。金襴、錦などは、舊き宮寺の納め物の袋に縫う

て入れ置けるを、祭の時、巫持ち出るづを、目には見れども身に觸れがたし。其時節は關東亂れ、國郡、在々、所々まで、私の弓矢を取り、爰彼處に關を据ゑ、海道往來安からず。去れども高野聖、笈を負ひて關東へ下る。是は弘法大師の修行の形を學べる聖とて、弓箭の中をも開けて通す。其笈の中に、金襴、錦の切れはしあり。此聖云ひけるは、「是は高野山の寺々にて、三世の佛を繪像に寫し、懸け置き給ふ、表具の裁ち殘しなり。此金襴、錦を、少しなりとも身に觸るれば、忌、穢を除く。故に佛神は常に御影を寫し給ふ。惡魔厄神は、怖ぢをのゝく」と語れば、此錦を、一寸二寸宛高う置ひて、幼なき人の守

り袋のはしなどに縫ひ付けしなり。扨又今は天下治り、御代豐かにして、貴賤男女ともに、昔見も聞きもせぬ結構成る唐織を着たまふ。王子淵が曰く、「旃を荷なひ毳を被るものには、ともに、純綿の、麗密をいひがたし」と云へるがごとく、今の世に見る、美々しきことどもをば、我等若きころの人達は夢にも知らず。人語るとも、いかて誠にせん。古語に「君子其室に居て其言を出だす」と。「善なる時は、千里の外皆是に應ず」と云々。誠に、萬里を隔つる他國も、近き我が國の如く往來絶えず。去る程に唐國にて、日本人の好める衣裳を、色々樣々に工み出だし、織出だして、毎年、相模の國浦賀湊へ、黑船着、唐と日本との

通詞出合ひ、賣買勇々しくぞ覺ゆる。

壽用軒古歌を難ずる事

聞しは今。或人物語りに、夫和歌は、長歌、短歌、旋頭、混本、折句など云ふて、體多しとかや。折句とは、「唐衣着つゝ馴れにしつましあれば遙々きぬる旅をしぞ思ふ。」此歌は、かきつばた、と云ふ五文字を、句の上に置きて讀めり。是は名歌なりと云ふ。壽用軒と云ふ人聞きて、「此歌善からず」と、嘲けり笑ふ。人聞きて、「其方は歌道を知らず。但し知つて笑ふか。知らで笑ふか」と問ふ、壽用軒答へて、「我れ歌の道を知らねども、三十一字の數をば覺えたり。此歌字餘りなり。字餘りの歌は面白からず」

と、古への歌人も戒しめ給ひたるとかや。扨又前に在る言葉を又云ふ事、言葉の病ひと云ひて、當世は重言を大いに嫌ふ」と云ふ。傍へなる人聞きて、「壽用軒の物知り氣色實しからず。件の唐衣の歌は、業平讀めり。古今集に見えたり。去れば文宣王の生知なりしも、「古へを捨てず」と申されし。重言、字餘りの歌も、歌によるべかりき。源の信明朝臣の歌に、「ほの〳〵と有明の月の月影に紅葉吹きおろす山おろしの風」、と讀めるは、ほの二つ、月三つ、おろす二つ、風二つあり、其上三字餘りたれども、名歌なるにや、新古今集に載せられたり。河海に、「君により、よゝよゝよゝと、よゝよゝと、音をのみぞ泣く、よゝよゝ

よゝと」と讀みたる歌は同字八つあり。との字のてには三つあれども、多きを手柄と讀みたるにや。夫難波の謠は祝言なり。「天下を守り治むる〳〵〳〵。萬歳樂ぞ。目出度〳〵〳〵」と謠へるはひが事なり。又萬の壽に、「珍重〳〵〳〵際限あるべからず」とこそ、文にも記るせり。壽用軒不勘にして、昔を欺むく事云ふに堪へたり。

慶長見聞集卷の四

蜘、山だちに似たる事

見しは今。時なるかな。夕涼しさはしゐして、詠むれば、蜘虚空に糸はへて、飛行の虫を止むる。去れば蟷螂手を擧げて、毒蛇を招き、蜘蛛網を張つて、飛鳥を襲ふとかや。ある詩に、「蜘山だちに似たり」と作られしは、をかしき例しを引かれたり。

昔將軍頼光公、瘧病を煩ひ給ふ。或る夜、燈の影より見れば、長七尺計の法師走り寄つて、頼光へ縄を懸んとす。頼光公、膝丸と云ふ名劔を抜いて、礑と切り給へば失せぬ。血流るゝ跡

を求むれば、北野の後ろに大なる塚あり。彼の塚へ入りたり。堀りて見るに、四尺計なる山蜘なり。黒鐵の串に刺し、大路を曝し給ふ。是より、膝丸を蜘切丸と改號す。此劔にて、末代までも、御門、世を治め給ひぬ。此る恐ろしき蜘、古へは候ひしとなり。去れども「蜘蛛さがりて、悦びあり」と云ふ本文あり。故に、人待つ夕暮近う、軒に下りたるを見て、「我が夫が來べき宵なり。さゝがにの蜘蛛の振舞兼てしるしも」、と衣通姫は詠み給ひけるとかや。人をも待たぬ、愚老が門の邊りに、蜘蛛の糸限りなくあり。是を日毎に拂へども絶えず。人云ひけるは、「蜘蛛を殺さずば絶ゆべからず」となり。然れども、佛は「罪と

知りて、蚊の足をもがず、蟻の子殺すもの、猶地獄に落つ」と戒しめ給ふ。又梵網經に、「一切の男女三界輪廻の四生皆是我父母なり、然るを、殺し食するは、我が父母を殺し食するなり」と說給へば、目の慰みせんとて、他生の苦を辨へざるは、愚痴の至りなり。其上、觀音は大悲の分身、化を垂れ蜘蛛と現じ給ふ事あり。吉備大臣は、元正天皇の遣唐使なり。在唐の時、耶馬臺の文を、唐帝より、是を讀み解ずんば殺さんとなり。吉備、是を見るに、文義さとりがたし。蜘蛛糸を引て、是を敎ふ。則ち讀む事を得たり。蜘蛛は是和州泊瀨觀音の冥助に依りてなり。「糸を懸けたる神のさゝがに」、と云ふ前句に「敎へある文字の

數々あらはれて」、と賢盛法師付け給ひぬ。扨又、山川大地何物か實相にあらざる。森羅萬象悉く佛心也。去れども蜘蛛の糸、身に觸れて益なし。如何せんと思ひしが「捨てて見よ野にも山にも何くにも身一ッ住まぬ隱れ家はなし」と讀みける歌を思出でて、童のありしに敎へて、竹の筒を持たせ、蜘を拾入れて、虫は匍匐方に餌ありとて、外へ捨つる。生物を殺さずして我れを得たり。天運限あれば、必ず飢ゑ凍えず」と云へば、傍へなる人是を聞きて「愚なる云ひ事ぞや、蜘蛛の糸を破りたるも科なるべし。其上己が住みなれし所を離れ、親も子も妻もあるべし。哀別離苦の理、人間に替はるべからず。何か是罪に非ずや」と

云ふ、去れども罪を作るに輕重あり。「小罪をば爲すとも、大罪をば爲す事なかれ」と、佛も戒しめ給ひしとなり。

清林和尚災難を逃るゝ事

見しは今。下總の國、小弓の大巖寺は、淨土宗關東第一の學寺たり。先年此寺に、安譽和尚と申す名匠まします。五百人の所化を集めて、法幢を取り給ひぬ。中に清林と云ふ所化、才智にして、一事を聞いて萬事を準らひ知る。學問世に勝れて、文珠の智惠德相を得たりと云ひならはす。法問の時に至つて、此寺の番頭を初め、老僧達、牙を嚙んで、此清林と論談すると云へども、清林、佛祖の妙文明句を取つて合せ、一問答に押しつむる。

或時は孔、孟、老、莊の金句を以て答へ、或時は世俗の言葉、目前の境界を以て示し、狂言綺語を以て察し、言葉に花を咲かせ、理に玉を列ぬ。布留那の辯を振ふ事、以て譬ふるに足らず。故に老僧達、嗔恚を起し、「夫れ智者は其功を建てん事を願ひ威名を四方に達せんとする所に、あの清林一人此寺に有る故、我等が廿年、三十年の修行も空しく埋れ、見佛聞法の人に無智に思はるゝ事の無念さ、口惜さよ。あの小僧めを、何にもして、寺中を追ひ拂はばや」と罵りかへり、古語に、「尊きをば卑しさが妬み、智者をば愚人が惡む」と云へる事思ひ知られたり。或時、一老と、清林と、言葉咎して諍ふ、一老心慚られたる人にて、

「あの箝師入道め」と惡口する。清林も、腹こそ立つらめ、「妻俱し入道め」と返答する。一老聞て、「言語に斷えたる惡言哉。妻俱し入道の子細聞くべし」と云ふ。五百人の所化、此由を聞き、「あの箝師入道めを、年月日頃惡し〳〵と思ひつるに、此る惡言吐く事、大巖寺末代未聞の惡僧たり。一老に恐れもなく、却て炎難を申し懸くる事、末代までも大巖寺を汚し、淨土一宗に疵を付くる事、惡逆無道、其罪逃るべからず。只石子積にするには若じ」と、五百人の所化ども、石を持ち寄りて庭に積み、已てに清林を呵責せんとす。上人爲方なく、清林を衣の袖の下へ隱し置き給へども、徒らなる所化ども亂れ入りて、叫ふべし

とは見えざりけり。上人覺し召すやう、此清林は、口才辯舌世に越え、當意即妙をば吐き、氣轉坊主なれば、君めぐしのはつしやあらんと、上人、清林を引き連れ、庭へ飛んで下り、「待て暫し、所化ども。雙方對決し、妻俱し入道の子細を聞き、非に落つる所を以て科に行ふべし」との宣ふ。五百人の所化ども、「此義尤」と同じ、大庭へ出でて雙方子細を聞くに、一老申されけるは、「あの清林めは、伊勢の國、渡會の郡、山岸と云ふ里にて生れたり。親をば彌五郎と云ひて、其里の桶の箝を懸けて身命を送る。其箝師の子なるが故に、箝師の入道と云ひたり。扨妻俱し入道の子細聞くべし」と云ふ。清林答へて、「尤も道理あり。

去ればこそ、其方が父は、妻を倶して汝生れたり。其妻倶しの子成るがゆゑ妻倶し入道」と云ふ。其時上人を初め五百人の所化、奇特凡慮に及ばぬ即妙なる返答、世に聞えたる氣轉坊生かなと感じ、一同はどつと笑ひて退散する。誠に「佛道に叶へる人は、毒蛇の口を逃れ、矢石も身に立たず。災難を逃るゝ」と云へる事實義なり。孟子に、「是非の心智の端なり」と云々。智者は聰明叡智と云うて、耳に聞き目に聞き、理非を分明にして、夫々に即時に氣轉を廻らすが故に、智と云ふ字をば、知り、曰すと書いたり。鏡の妍醜を辨ずるが如く、智者は萬に暗からず。論語に、「言を知らずんば人を知る事なし」と云々。扨又樊遲、

智を問ふ。子、答へて「人を知る」と云へり。安譽上人は、誠に智者にて、よく人を知り給ふ。五百人の所化ども、既に石子積にする所を、清林は目聞き心聞き智者とよく知りて、庭へとつて出だされたるは、師弟同心の智者にてまします。此清林修行成就の後、琴上人と申して、關東にて法幢を執り、智德靈驗にまします。他に殊なること譬へがたし。今は京東山の黒谷に侍り給ひけり。大御所樣、殊更以て御信敬なり。諸人渴仰の首べを傾ぷけずと云ふ事なし。當代淨土の名智識と聞こえたり。

江戸町衆乘物に乘る事

見しは昔。十年已前の事かとよ。江戸町の内に、一人二人乘物

に乗り、異様を好み、よせいして往來する者あり。是を見て其町人は申すに及ばず、余の町衆までも、是の非を疾み、腹を据ゑ兼ねて云ひける樣は、「乘物に乘る人は、智者、上人、高家の面々、其外の人達にも、位なくては乘り難し。去れば江戸町には、奈良屋、樽屋、北村とて、三人の年寄あり。町の者が乘るならば、先づ此等の人こそ乘るべけれ。人も得知らぬ町人の分として、上も恐れず、世の批判を辨へず、推參奴めが振舞かな。哀れ我れ人に路次にてさはれかし。言咎めして寄り合うて、乘物を踏み破り、自慢顔する男奴を、海道に蹈み顚倒し、頭を擡げさせず、物履きながら、むす〳〵と、しや頰を蹈みたくり、

土にまみれて見たもなき姿を、往來の人に見せばやなん」とて、叱りつるが、今見れば、如何なる町人も乘ると見えたりと云へば、傍へなる人の曰く、「義は宜なり、時の宜しきに隨ふ」と云へるなれば、當世流行物、誰れとても乘りて見よきなり。去れば刹那の榮花も、心を陳ぶる道理を思へば、無爲の快樂に同じ。壽命は蜉蝣の如し。晨に生じて夕に死す。今時の風として、引込思案、一期人に得ならず。一生は夢の如し。誰れか百年を送らん、「一日さへ存命へ難き露の世に」、と前句に、「友どぞ見まし槿の花、」と兼哉付け給へるこそ殊勝なれ。「松樹千年遂に朽ちぬ、槿花一日自ら榮なり」など云ひて、高きも賤しきも、乘輿する

所に、此由公方に聞し只し、慶長十九年御法度仰せ度さるゝ趣き。

雜人ほしい儘に乘輿すべからざる事

古來其人に依つて、御免なく乘る家是有り。御免已後乘る家是有り。然るを昵近、家老、諸卒に及ぶまで乘輿、誠に濫吹の至りなり。向後に於ては、國大名以下、一門の歴々、幷びに醫陰の兩道、或ひは六十以上の人、或ひは病人等は御免に及ばず乘るべし。國々の諸大名の家中に至りては、其主人、仁體を選み、吟味を遂げ、此を許すべし。妄りに乘らしめば曲事たるべき者なり。但し公家、門跡、出家の衆は制の限りに有らずと云ふ。

是に依つて、今は諸人子細なくして、乘輿する事能はず。

當世男髭なき事

見しは昔。愚老若き比、關東にて、男の額毛、頭の毛をば、髪剃にても剃らず。「けつしき」とて、木を以て鋏を大にこしらへ、其けつしき、頭の毛を拔きつれば、頭より黑血流れて、物凄しかりしなり。頭に瓢簞の如くにて、毛のなきを男の本意風俗とす。扨又髭生えたる人をば、面惡體、髭男と云うて譽むる故に、皆人髭を願ひ給へり。去ば「建久三年壬子十月卅日、鎌倉に、燒亡す。牧三郎宗近が家より出來たり。折節宗近他所に在りしが、烟を見て走り向ひ、經を取出さんと欲する間、左りの方の

頰髭を燒くと」云々、諸人沙汰し給ひけるは、「唐國、太宗の髭は藥を給るの仁にたち、我朝の、宗近が髭は經を惜むの志をあらはす。燒く所は同じけれども、用ふる所は相異なる者は、宗近は髭を燒いて、舊記に乘り、名譽を彰はせり」云々。髭生えたる人は自慢顏して、「氣晴ては風新柳の髭を洗ふ」と作れる詩の心も面白し、昔頼義、貞任、宗任を攻められし時度々に及んで、十人の首を髭ともに切りたる劍あり。故に髭切と名付け、源氏重代の寶劍、奥州の住人、文壽と云ふ鍛冶鑄たり。此等も髭の威德ならずや」、などゝ云ひて、明暮髭を撫で上げ撫て下し拈り給ひけり。又髭生えぬをば、女面と云うて嘲らい笑ふ。催

馬樂に、「けふくなら」とは髭なき事と有り。萬葉に、「勝間田の池はわれしる蓮なし。しか云ふ君が髭の無き如」と詠めり。然るに髭生えぬ男は、一期の片輪に生れける事の無念さよ。女面と見らるゝ口惜さよと。人の餘所言言ふをも、我が髭の科と、悲かしさの思ひ内に在れば色顏に顯はるゝ。去ば天正の頃ほひ、小田原にて、岩崎嘉左衞門、片井六郎兵衞と云ふ者、戯言を云ひ擧り諍ふ。嘉左衞門が髭なし。六郎兵衞、「あの髭なし」と惡口しければ、即時に刺し違へ死にたり。去る程に、男たる人の、髭なしと云はるゝは臆病者と云はるゝ程の恥辱に思ひ給へり。故に、髭なき男は、哀れ、髭生ゆる者あらば、身をしろか

へて毛髭を生えさせばやと願ひたる。此十四五年此方、頭に毛のなきを、年寄のきんかつぶり、蠅すべりなどゝ、仇名を云うて、若き人達笑ふ。扨髭生えたる面は「鈍なる面、蝦夷が島の人に善く似たり」と云ひ慣はし上下の髭殘さず毛拔にて拔き捨つる。然る間、笠を着、頭包みたる人を見れば、法師とも、男女とも見分がたし。去れども昔に返る事も有るべければ、異相なる人ありて、頭の毛を拔き、髭を生えさせたらんには、皆人髭生えて、昔男の業平とや云はん。

諸士弓筆の道を學び給へる事

見しは今。年久しく國治り、萬民安穩に榮え、目出度御時代な

り。然る處に、當年秀頼公、逆心に付いて、江戸より御出馬され大坂落城す。愈々天下太平、弓矢治り、閑かなる御世上なり。去れども文武二道を忘るゝ時は、必ず國亂ると云へる本文有り。萬事常に油斷ありて、其亂に望んで爲んと欲する事、軍見て矢作ぐが如し。然るに將軍家、諸侍の御法度を、大坂御城に於て仰せ觸れらるゝ旨、則ち是を載せ奉る。

武家諸法度

一文武弓馬の道專可相嗜事

文を左に、武を右にするは、古への法なり。兼備せずんば有るべからず。弓馬は是武家の要樞なり。兵を號けて兇器とす。

止む事を得ずして用ゆ。治にも亂を忘れず。何ぞ修練を勵まさざらんや。

一可レ制二群飲佚遊一事

令條に載する所、嚴制殊に重し。好色にふけり、博奕を業とするは、是亡國の基なり。

一背二法度一輩不レ可レ隱三置於二國々一事。

法は是禮節の本なり。法を以て理を破り、理を以て法を破らず。法を背くの類、其科輕からず。

一國々大名並諸給人各相二抱士卒一有下爲二反逆一殺二害人一告者上可二追出一事。

夫野心をさし挿む者は、國家をくつがへす利器、人民を絶つの鋒劍なり。豈許容するに足んや。

一諸國居城雖レ爲二修補一必可二言之一況新規構營堅令二停止一事。

城の百雉に過たるは國の害なり。壘を峻し、湟を浚するは大亂の本なり。

一於二隣國一企二新義一結二徒黨一者有レ之ば早可レ致二言上一事

人皆黨あり。亦達する者少なし。是を以て、或は君父に順はず、忽ち隣里に違ふ。舊制を專とせずして、何ぞ新義を企てんや。

一私不レ可レ結二婚姻一事。

夫婚合は、陰陽和同の道なり。容易にすべからず。睽に云ふ寇あるに有らずんば婚媾してんと志し將に返らんとすれども、寇有る則は時を失ふ。桃天に曰く「男女正を以て婚姻、時を以てすれば、國に鰥なる民なし」と、緣を以て黨を成すは、是姦謀の本なり。

一衣裳之料不レ可二混亂一事。

君臣上下各別たるべし。白綾、白小袖、紫の袷、紫の裏、無紋の小袖、御免なき衆、妄りに着用有るべからず。近代、郎從、諸卒、綾羅錦繡等、飾服、古法にあらず。是を制す。

一雜人姿に不レ可二乘輿一事。

古來、其人に依つて、御免なく乘る家之れ有り。御免已後乘る之れ有り。然るを近來、家老諸士に及ぶまで、乘輿誠に濫吹の至りなり。向後に於ては、國大名以下、一門の歷々、並びに醫陰兩道、或は六十以上の人、或は病人等は、御免に及ばず乘るべし。其外昵近の衆は、御免以後乘るべし。國々諸大名の家中に至りては、其主人、仁體を撰び、吟味を遂げ、是を免すべし。妄りに乘らしめば越度たるべきなり。但し公家、門跡、諸出家の衆は制の限りにあらず。

一諸國諸士可レ被レ用二儉約一事。

富者愈誇り、貧成る者は及ばざる事を恥づ。俗の凋弊、是よ

り甚しきはなし。嚴制せしむる所なり。

一國主可レ撰二政務之器用一事。

凡國を治むる道は、人を得るに在り。明かに功過を察し、賞罰必ず當る、國に善人有則者、其國彌殷りなり。國に善人なき則は、其國必ず亡ぶ。是先哲の明誡なり。右可レ守二此旨一者なり。

慶長十九極月日

此の如くの御法度、天下の諸侍、違背せんと云ふ事なし。古へ月氏國の照堯、震旦の魏文、日域の聖德、是等の先德、文を以て、世を治め給ひぬ。今の御時代、遍ねく文を勵し武を嗜んで

五常を專らとせり。其上將軍家、佛神を信敬し給ふ。數百年天下治らざるに依つて、日本國中の靈寺、靈社絶え果て、野干の栖となる處に、絶えたるを起し、破損を再興有りて、先例を尋ね問はしめ給ひ、皆悉く、御黑印を以て、寺領、社領を出さる事、擧げて數ふべからず。夫れ「天台には、王城の鎮守として八百五十餘年に及び、我が朝第一の靈山なり、此山滅亡せば、國家も滅亡せんと、大師、宣ひけるに、永祿の年、信長燒き亡ぼし、既に絶え果てたる跡を、又改めて寺領を宛て行はる、御敎書に云ふ。

比叡山、延曆寺領、近江國志賀郡內所々、都合五千石別書目錄在事。

永代令ニ寄附一畢、全可レ被ニ寺務一之狀如レ件

慶長十五年七月十七日、山門三院執行代

右の如く、御政道正しく御座し候ゆゑ、佛法、王法、繁昌なし四海、遠く浪の上までも穩やかに、萬民樂しびあへり、詞花に「君が代は白雲懸る筑波根の嶺のつゞきの海と成るまで」、久しかれとぞ祝し申しける。

慶長見聞集卷の五

日本橋市を爲す事

見しは今。江戸町、東西南北に、堀川有りて、橋も多し。其數を知らず。扨又御城、大手の堀を流れて落つる大河一筋有り。此川、町中を流れて南の海へ落つる。此川に日本橋只一筋懸りたり。是は往復の橋なり。町中往き通ひの人、此橋一つに集つて往來なせり。夫世の有り樣、人の心頑しくして、萬に付けて、我は善かれ、人は惡しかれとのみ思へり。去る程に、我が心人に似ず、人の心我れに似ずして、邪念計にて、一生涯を明し暮

せり。然るに日本橋を見渡せば、夜となく晝となく、人の立ち並びたるは、只是市の如し。去れども、是や此行くも歸るも別れては知るも知らぬも、逢ふ橋の上に、立ちも留らずして、群集の中を、覺えず知らず行き違ひ、我れ善し、人善しに、此橋を素直に渡る事、常の曲れる心には、大きに相違せり」と云へば、老人聞きて我れも人も、此橋群集の中を、明暮通ると云へども、此心付きはなかりし。不審は殊勝なり。件の日本橋は、慶長八癸卯の年江戸町割の時分、新規に出來たり。其後、此橋御再興は、元和四年戊午の年なり。大河なればとて、河中へ兩方より石垣を築き出し架け給ふ、敷板の上三十七間四尺五寸。

廣さ四間二尺五寸なり。此橋に於ては、晝夜二六時中、諸人群を爲し、踵を次で、往還絶ゆる事なし。去れば天理と云つて一つの理體あり。此理體を、人間保たぬは一人もなし、是はまからず素直にして平等なる體なり。然れども、衆生の性、慾に引墜されて、彼れ本分の正理を失ひ、邪念に着して暇あらず。孟子に云ふ、「惻隱の心は仁の端なり。羞惡の心は義の端なり。辭讓の心は禮の端なり。是非の心は智の端なり」と云々。是を四端と名付く。いはゆる惻隱とは、哀れみ悲しむ心。羞惡とは己が惡を愧ぢ、他人の惡を憎む心。辭讓とは、我が方へ受くる名利を辭し、人に讓る心。是非とは、善をば善とし、惡をば惡と

辨ふる心なり。此四端は、人心になくして叶はず。件の四端を行ふ時は、我が身を素直に修め、人をも修め、天下國家大平なり。去れども、眼、耳、鼻、舌、身、意の六賊に着して、一生涯彼の惡業に繫がれ生死のさづな離れがたし。然る所に、件の日本橋に蹈み入る人、老若男女、尊きも、賤しきも、智者も、愚者も、推しなべて、心正路に在りて、人も善く、我も善く此橋を渡る事、私の力に在るべからず。菩薩の法劍を以て、罪業の大綱を切り捨て給ふが故なるべし。夫は如何にとなれば、橋は勢至菩薩の尊形を表し給ふと云々。是遍へに、衆生利益の御方便、一人も漏らさず、救ひ給はんとの御盟ひなり。かるが

故に佛法を行ずる衆生、遍く菩薩の蓮臺に乘ず。海川にては、舟橋を蓮臺とする云々。「如渡得船」と、說かせ給ふも是也。東坡が云く、「舟を同うして風に遇ふ時は、胡、越も相救はしむべき事、左右の手の如し」と云へるに殊ならず。熟ら是を案んずるに、水は是聖人の心に同うして正路を本とせり。「水は方圓の器に從がひ、人は善惡の友に寄る」となり。故に、「水能く橋を浮かべ、橋能く人を渡す。是善友に觸るゝ明德なるべし。然る時は、此日本橋は、正路の鏡、萬物是に影を寫す。又、まがれる心を諫むる、師橋にて有らずや、古き言葉に「銅を以て鏡とし、人を以て鏡としては得失を知る」。又「心を以

て鏡とする時は、萬法を照らす」と云へり。其上鏡は、「百王の御面を看そなはし、萬民正路を正す」と云々。夫橋の始まりは、支那より、しんたん國へ行く間に、流沙河とて長さ八千里流る大河有り。三世の諸佛集つて、此川に石橋を懸け給ひぬ。石橋と云ふは是なり。扨又日本にては、伊勢の宇治橋が、架け初めなり。今賢君の御代なれば、臣も、臣德を輝かし、橋も心のあれば、素直に人を渡せる成るべし。心もし、馳せ散ぜば、知つてしたがはず。常に心を師とし、常に心を師とせざれ。すべからく、諸人、此日本橋を師とし鏡として、常に心に懸け置きなば、何どか素直に世を渡り給はざらん。

都人待乳山一見の事　附宗齋事

見しは今。玉屋永壽と云ふ京の人、當年江戸へ下り、云ひけるやうは、「此邊に、音に聞し待乳山と云ふ名所有り、是を見物せん」と云ふ。愚老知人なれば同道し、淺草の里近くに、小塚一つ有り、「是ぞ待乳山」と敎ふる、永壽此名所を一見し、「東國へ下りての思ひ出、何か是には若じ。去れば新勅撰に、「待ち山夕越え行きて庵崎の角田河原に獨かも寐ん」、と辨基法師詠ぜり。此待乳山、下總の内の歌抄に入れられたり。武藏の國に有る事不審なり」と云ふ、里の翁答へて、「尤も三つの名所、並びて有りと云へども庵崎は、下總に在り。待乳山は、武藏に在り。此

兩國の境を、角田川流るゝ。是に依つて讀み入れたる歌も有べしと云ふ。永壽聞きて、「此角田川の邊にて、武藏、下總の國を見渡せば、此山より、外に、別に山なし。遙けき野原なり。實にも是をこそ待乳山とは云ふべけれ。去れども、待乳山、國替つて同名多し。續古今に、「信土の山の葛がつら」と、鎌倉の右大臣詠ずるは、紀伊なり。大和、土佐、駿河にも讀みたり。扨又新古今に、「誰をかも待乳の山の女郎花秋と契れる人ぞあるらし」。小野の小町詠めり。續古今に、「かくばかり待乳の山の時鳥心知らでやよそに鳴くらん。」天曆の御歌。此二首紀州なり。去れども、武藏にも詠ずるとかや。但し、女郎花、時鳥を、武

藏に讀みたる事覺束なしと云ふ。里人答へて、後撰集に、「女郎花匂へる秋の武藏野は常よりも猶睦ましきかな」。又、「武藏野は歸る山なき時鳥秋は何くに草がくれけん」と讀みたり。領江齋の發句に、「武藏野や草より出る時鳥」、とせられたり。我れ賤しき身にて、歌の道をば知り侍らず。所の申し傳へ此のごとし。扨又此原を淺茅原と云ふ。是も名所なり。彼れに見えたる森の中に、古寺有り。此は角田河の謠に作りたる、梅若丸の母の寺なり。母愛にて髮を剃り、妙喜と名付く。里人憐れみ、草の庵を結び置きければ、是にて念佛申して果てられたり。古へ比丘尼寺なりしが、今は總泉寺と號し、禪寺なり。又、母懷中より、

鏡を取り出し、是なる池へ捨てたる故、今に鏡の池と名付く」と、委しく語る。都人聞きて、妙喜のいはれ哀れなり。扨武藏の待乳山、小さしと云へども、聞えは日本に廣ごり、名高き山なり。哀れは猶も、「武藏野の待乳の山の人ならば都の土產にいざと云はましを」、と云へる、都人こそやさしけれ。爰に、宗齋と云ふ人、是を聞きて、「我れ、江戸に、年久しく住みけれども、此邊りに、待乳山とて、都までも音に聞えし山有るべしとも覺えず」。不審に思ひ、是を人に尋ぬれば、淺草の里離れに、小さき塚あり。是ぞ待乳山と敎ふる。宗齋聞きて、から〳〵と打笑ひ、是は、聖天塚とて、昔より塚の上に小社あり。塚の本に小

寺ありしが、近年は絕えてなし。是は地形よりも高し。上に聖天塚とて、小さき塚あるにより、此所を聖天塚と名付く。我れこそ、此塚のいはれ善く知りたれ。武藏の國は平地にて、眺むる山のなければとて、此聖天塚を、山と云はんは、さぞな都人も、聞きて千金、見て一毛とかや、笑ひ給はん事の慙かしさよ」と云ふ。傍へなる人、是を聞きて、「愚なる宗齋の云ひ事ぞや。いで去らば、待乳山の山來を語りて聞かせん。抑淺草寺の觀世音は、昔日當所の海中より出現し給ふ前方便に此山、一夜の内に湧出す。推古天皇の御宇とかや。是を、金龍山と名付く。故に金龍山淺草寺と號す。又富士山は、孝靈天皇の御宇、一夜

に湧出す。此二山は地より生れ出てたり。又天竺、五大山、二つに割れ、片割飛で、常陸の國筑波山となり、片割は大和の吉野山となる。此二山は、天より降りたり。去れば右の四山は、我が朝に於て、奇妙の靈山なり。金龍山の實名を、歌にやはらげて、待乳山と詠ぜり。扨又宗齋、江戸にて諸人の、山の詠を知らざるや。見渡せる山々には、安房に、もとな山、上總に、鬼涙山、下總に、海上山、常陸に、筑波山、下野に、日光山、越後に、三國山、信濃に、淺間山、上野に、赤城山、甲斐に、白根嶽、相模に、箱根山、伊豆に、御山、駿河に、富士山、此十二ヶ國の名山を、武藏二十一郡の廻りに立て、軒ばに立て、

「武藏野もさすが果なき日數にや。富士の根ならぬ山も見ゆらん」、と宗久法師は讀み給ひぬ。天の原なる月の眺めは、何處も同じと云ひながら、更級にて見る月こそ、いとゞ哀れは增らまし。花は吉野、紅葉は立田、唐國まで、音に聞えし富士の山も、武藏野にての詠こそ猶も面白けれ。江戸の城は、昔し太田備中守道眞入道、同じく左衞門大夫忠景、道灌入道、初めて郭と爲すと云ひ傳へり。道灌、江戸、河越兩城を持ち、三十餘年弓矢の譽れ久しかりき。道灌は文明十八年七月廿六日、五十六歲にして、主君上杉定正の爲めに害せられぬ。扨又、江、河兩城は、上杉修理大夫朝興公、先祖の家老、太田道眞と云ふ者、

初めて郭と爲すと。慥なる文に記せり。道眞は、道濯が父なるとかや。然る時は、江城の始まりは、慶長十九當年の頃までは、百七八十年以前と知られたり。道眞、當城を取り立て、先づ、西南の角に、「矢倉を一つ立つ。是を富士見矢倉と名付く。古詩に、「西樓に月落て」と作れる。朗詠に、「北斗の星の前には旅鴈横たへ、南樓の月の下には寒衣を擣つ」などゝ吟ぜり。されば大唐の内裏には、王の御涼み處をば、高樓と名付けて、高く嶮しく作るなり。君、常に彼の樓に住み給ふに依りて、朕と云ふ。此樓。四方に在り。東に有るをば、陽樓。東樓とも云ふ。是は花見の樓なり。南に有るをば、南樓と云ひて涼み樓なり。西に

有るをば西樓と云ふなり。是は月を詠め給ふ樓なり。北に在るをば、陰樓と云へり。雪見の樓なり。常の樓を、ちん、などゝ云はんには亭、此字然るべきなり。何れも休み所なり。樓の字は、たかやぐら、と讀めり。「窓には西嶺千秋の雪を含み、門には東吳萬里の舟を繫ぐ」と作れり。「我が庵は松原つゞき、海近く、富士の高根を軒にこそ見れ、」などゝ詠吟せられし。其富士見矢倉、慶長年中まで殘りて有りしを、宗齋は、江戸の人にて、富士見矢倉の名をば能く知り、其矢倉へも登りつれども、心拙なきにより、富士をば、未だ見ざりけるや。人生を受くるといへども、徒らに星霜を送り、圓月に向ふと云へども、瞽者の如

くにして、其明なる事をも知らず。誠に人中の木石とも云ひつべし。今又江戸の家作り、尊きも、賤しきも、心あらん人は、家をば夏を形どり南へ向け、窓を西へ明けて、三國一の名山、新古今に、「時知らぬ山は富士の根、何とてか鹿の子班に雪の降るらん」、と明暮絶えぬ眺めせり。新後拾遺に、「富士の根を振りさけ見れば、白雪の尾花につゞく武藏野の原」。「夕かげは巨多の國に移りけり。武藏野近き富士の三日月」、と讀めり。是等の歌、本歌なるがゆゑ、大原千句に、「武藏野や何を限りの道ならん」、と云ふ前句に、「富士を見る〳〵假り臥しの夢」。扨又、紹巴、昌室兩吟千句に、「堺も遠く向ふ富士の根」、と云ふ句に、「武藏

野や草を枕の明けはて丶」と付けられたり。されば古今の連歌師達、富士と云ふ前句あれば、やがて武藏と付け給ふ。江戸の境地、山を見ずと、宗齋云へるは、誠に、鳥は鳴く聲を以て其名を表はし、人は一言を以て、胸中を嘲ると云へる、古人の言葉思ひ知られたり。

才兵衞諸藝を俄に學ぶ事

見しは今。江戸町に、木村才兵衞と云ふ人、如何なる仕合せにや、此頃俄に富みて時めきあへり。此人藝者に逢ひて云ひけるは、「我人に交り、なまじいに座席に列ると云へども、萬、無能故に恥辱多し。剩さへ伴に嫌はれ無念至極なり。今日より藝能

學ぶべし。然れば十能七藝有りとかや。其中に遍ねく人の用ゐる藝より習ひ初めん。同じくは師匠へ金を合力し、早く能者に成らばや」と云ふ、師聞て、「愚なる才兵衛の願ひ事や。金にて藝を知るならば、福財の人、皆物知りにやならん。古へ聖賢も、貧にして學を好んで其名を得給へり。故に秀句は必ず飢寒に在りと云々。去る程に、食過ぎぬれば學問薄く、酒に醉ひぬれば心狂亂すと古人云へり。富める人は尊とからず。智有る人こそ尊とけれ。其方、藝能望みならば、只志を積むにはしかじ。勸學の文に、「無學の人は、物に比すれども絶えてなし。糞土にも劣れり」と云へり。禮記に、人學ばざれば道を知らず」と書かれたり。世間の人、我が嫌ひの藝を、人の上手に爲るをば、入らざるやうに思ひ、一向に用ゐずして、我が好きの藝を、人の上手に致すをば、勇々しく思へり。是愚なる心なり。何れの藝も、上手に在れば、益有るべし。昔の學人を、傳へ聞きしに、炎暑の折々は夜涼の時に至りて、紅螢を拾ひ、寒天の節には、雪窓に向つて膏油を燒いて以て晷をつぎ、三餘寸陰を惜しむ。去れば古人は、月々に鍛ひ、年々に練ると云へども、學究め難しと云へり。縱ひ其身、生れつき善くとも、賢聖の道を學ばずば、成るべからず。況や、生れ付き惡しく、愚ならば勿論なり、萬物を覺えんには、聞書と云ひて、我れ知らざる事を聞きては、一言

宛も書き置く事なり。「聞く時學ばされば、過ぎて後悔ゆ」と古德も云へり。水積る時は淵となり、學積る時は聖となる。財寶を求むるにも、一度に求めんとしては叶ひ難し。文選の言葉に、「千里は足下より起る、山は微塵より成る」と云へるなれば、諸藝を一度には學びがたし。先づ一藝を求め、月日を重ね、功を積まずしては成り難し」とぞ諫めける。

花折る咎に繩にかゝる事

見しは今。春三月五日の事かとよ。湯島の傍らに、櫻花盛りに見えたり。是は江戸御代官の花園。花守には馬場多左衞門、古戸三右衞門とて、兩人有りけり。然るに愚老、湯島の寺に所用

有りて、童を遣す所に、此花、道の邊りに咲き亂れたるを見て、家苴にやせんと思ひ、一枝手折りけるに、兩人の花守、是を見付け、「やれ花盜人よ、何處の者よ。しやつ逃すな」と、棒を引き提げ、追ひ懸つて、散々に打擲し、「よく縛めよ」と、首に綱さして、「あら嬉しやな。明暮に花を守れども、驗しなければ、守る甲斐もなし。願ふに幸。是を主君へ忠節にせん」と、櫻木に結ひ付け、木の本を立ちさり、見て思ひ出せる事の有りて、扨をかしくも有りけるぞや。「春來れば花の下にて繩つきて」、と多左衞門申されければ、三右衞門聞きて、「えぼし櫻と人や見るらん」、誠に能の狂言に能く似たり〳〵と云ひて笑ひ給

ふ。童是を聞き、ぶち縛られ、喉がつまり、腕は切入り、死ぬる思ひ、詫びたりとても甲斐あるまじ。今の狂句の返歌をして、此人々に言葉をかはし、詫びばやなんと思ひ、「春來れば花の下にて繩つけて、えぼし櫻と人や見るらん」、と申しければ、花守たち、是を聞きて、「今我々が、口ずさみを、何が面白さに、彼奴め口眞似しけるぞや」と問ひ給ふ。童聞きて、「此く繩に懸る身として、御花守の御詠歌を、其恐れもなく、奪參らせて吟ずる事、御腹立ち道理なり、去れども、歌の道なれば、御奉行衆も許し給ふべし。貴からずして、上人に交はるも、是和歌の徳とかや。其上一毛大山とは歌道に有る事なりと古師も申し置

れたり。今の歌を詠吟有りて御覽候へ。繩つきての、さを引き除けて、けと云ふ一字替へて、童が讀みたる返歌なり。鸚鵡返しの歌の樣、此の如し。御奉行衆も、さぞ御存知なれども、童が心を引き見ん爲め、御戯れに問はせ給ひ候かや」花守達、是を聞きて、「實にも優しき咎めかな。雲の上に、有りし昔の舊る事も、聞つるやうに覺えたり。去れども今の歌は、我等が心中を、思ひ遣りての返歌なり。扨又汝が思惑を、一言列ねよかし」と仰せなり。童聞て、「知らざりき花の下にて繩つきてかくえぼしきて櫻見んとは」、と申しければ、花守達聞きて、「姿優しき童なれば、花を偷み、江戸町にて、賣らんとこそ思ひしに、優しく

も言の葉を列ねけるこそ不思議なれ、さありとても、古語に、「日月は一物の爲めに其明を暗まさず。明主は一人の爲めに其法をまげず」と云へり。御法度背きし花盗人に縄懸けて、私には赦し難し。汝が主は何者ぞ」。童聞きて、主の名を、譬ひ死罪に及ぶとも、名乗らじ物とは存ずれども、花を見ては枝を折る習ひ、色を見ては灰をさすとかや。あらけなき花守達の御氣色も、今は少しやはらぎて見え候へば、童が主は、江戸伊勢町の傍らに居住仕る三浦屋淨心と申す者にて候」。花守聞きて、「急ぎ伊勢町へ使を建てられたり。科の子細の有りければ、年寄五人組引き連れて、御代官の花山、湯島へ急ぎ參るべし」と、愚老の所へ

御使立つ。我れ此事をば夢にも知らず。御奉行より召されけるは、如何なる科ぞと、胸騒ぎし、周章ふためき、湯島の花山へ參り、多左衞門、三右衞門兩人の御前に、面をうなだれ、突這ひたり。御奉行衆御覽じて、「三浦屋淨心とは彼奴めが事か。此花盗人は汝が小者か。御代官の花園にて、花を偷めと敎へけるや。文選の言葉に、「瓜田に履を納れず。李下に冠を正さず」とこそあれ。花を愛する者は根を枯さず。雪を愛する者は庭を踏まず。大切に思し召し、垣込め給ふ花園に踏み入りて、落花狼藉云ふに絶えたり。主從ともに、先づ籠者さすべし」と、三右衞門申されければ、多左衞門聞きて、「いや左樣にゆるかせに

沙汰致さば、向後の狼藉絶ゆべからず、貞觀政要に「賞罰は輕く行ふべからず」と云々、其上「一善賞する時は衆善進み、一惡罰する時は衆惡怖る」。彼等二人の科を戒むるは、萬人を助けん爲めなり。則ち爰にて、首刎ねて捨つべし」と、さもあらけなき仰せなり。愚老肝を消し、魂も失せ果て、此く有るべしと思ひなば、中途より何處へも逐轉すべきを。悲しやな。愚人、夏の虫、飛んで火に入るとや。賴む方なく、爲方なく、四邊を見れば、天神の御社近く立ち給ふ。常に賴みを懸け申しし大慈大悲の御結緣、何どか空しからん。此度殃難の災を除き給へ。南無天滿大自在天神と、心中に深く祈誓を懸け、怖れ畏〳〵計なり。

天神の別當走り出で申されけるは、「如何にや花守達聞し食せ、此童、花を手折りて、縲絏の責に逢ふとかや、去れば、素性法師の詠に、『見てのみや人に語らん、櫻花手毎に折りて家苴にせん』と古今集に見えたり。酒を好む猩々は甕のほとりに繫がれ、花を愛せし此童は櫻木の本に繫がれて、優しくも言の葉を列ねたるとや。紅は園に植ゑても隱れなし。昔も去る例し有り。家隆の子息の、禪師隆尊、修行の時、或る地頭の、前栽の櫻花を、一枝折りし其科により搦められて、禪師、『白波の名をば立つとも、吉野山、花ゆゑ沈む身をば怨みじ』、と讀み給へば、主人聞て『哀れなり』とて、繩を赦してけり。夫れ歌は武き武士の心を

やはらげ、神明の冥慮にも叶ひ、鬼神も忽然と納受して、ゆうくわいの災を除くとかや。古語に、『盗人錦ある事を見て人有る事を見ず、故に是を取る』、左の如く、此童花ある事を見て御花守達ましますを見ず。故に捕らはるゝ。花に深き執心、やさしき風流なり。紹巴の發句に『姿には似ざりし花の心かな』、とせられしも思ひ出でられたり。古歌に、『山人の薪に花を折そへてさまにもおはぬ心見えけり』、と詠ぜり。『小人は人の一悪を見て百恩を忘れ、君子は人の一善を見て百悪の恨を忘る』と云へり。此者形にも似ず、花を愛し、歌を讀み、やさ童なれば、可愛ゆげに、細を赦し給へ」と有りしかば、御奉行衆不便にや覺し召

されけん。仰せられけるは、「此童、優しくも言の葉を列ねたり。寺の前の童部は習はぬ經を讀むと云へば、さぞな主は歌を讀むらん。一首仕れ。此難を赦すべし」との御事なり。愚老是を聞き、あら有りがたの御慈悲やな。是は遍へに天神の御利生ぞと、威光を深く仰ぐなり。去れども歌の事は、得たらん人にてそ候はめ。愚老が今の言葉の末、如何で御花守達の御心に叶ふべき、と思ふ内より念願し、神に祈りを懸巻も、卑詞一首を、卒かに綴つて以て汗水を流し、顫へ〳〵かくぞ申しける、「千早振この神垣の花の元に、懸かるもとけて御注連縄かな。」御奉行衆は聞し召し、主從、佗歌を列ねけるこそ優しけれ。死罪に及ぶ

べけれども、赦し給ふと、夕しての繩をとく〳〵「汝が家に歸るべし」との仰せなり。あら有りがたの、忠岑が長歌に、「身はしもながら言の葉を天津空まで聞え擧げ」、と書きたるも、今身の上に知られたり。主從虎口を逃れ、私宅に歸り、悅びぬ。

樂阿彌乞食の事

見しは今。樂阿彌とて、江戸を歩く乞食あり。狂言綺語を云ひて、人の心を慰さめ、扨又、「隱家は心の内に在る者を知らでや山の奥に入るらん」、と讀める古き歌に、節を付けて歌ひ、町を歩き廻れば、一日に錢を、百も二百も貰ふ。或時樂阿彌、町へ出でて云ふやう、「我れ今日の貰ひを半分取らせ、小者を雇はん」

と云ふ。樂阿彌が、錢貰ふ事、隱れなければ、賃取、出でて雇はるゝ。樂阿彌は、常に赤手拭にて頭を包み、總じて興がる姿なり。小者を連れ、小歌を歌ひ、町を廻り、萬の殘飯、魚の切り屑、何にても、人の呉るゝ物を取りて持たせ、日も暮れぬれば、半分小者に遣り、半分にては己れが一日の口を養ひ、扨手を打ち敲いて、爰の辻、彼處の道の邊りに臥して夜を明す。又或る時は、樂阿彌小者をも雇はず、獨り歩行を爲し、錢を一貫計り持ち、首へ懸けて歩く。人、是を見て、扨は樂阿彌は、悧悋くなり、欲をも知りたるかと思ふ處に、樂阿彌、傳馬町へ行き、毛よき馬を借り、鞍置かせ、萬道具を借集め、日本橋に立ち出て

大音擧げて云ふやう、「今日は廿四日、樂阿彌が愛宕參詣なり。小者、仲間を傭はん」と呼はる、日本橋の事なれば、賃取ども、我も〳〵と云ふ儘に、百人計り集り、樂阿彌を押つ取り捲いて、頻振り上げ、聲を立て、「傭はれん」と云ふ。樂阿彌、四方を見廻し、健よかなる若き者、侍がましき者どもを、かひ撰り〳〵、錢を取らせ、打つ立つ。其日の勢揃ひを、往來の人が留まつて、群集を爲して見物する。先づ、鑓持、長刀持、弓、鐵炮、鋏箱、指換の刀擔がせ、四邊に若黨四五人連れ、我が身は馬に打ち乘りて、兩口取らせ、愛宕へ參詣するこそをかしけれ。知らぬ他國の道行人は、大名の御通りとて、恐れを爲してぞ通

しける。愛宕の山に登りては、何事にても、樂阿彌が、願ふ事こそなけれとて、大酒飲みて、日暮るれば、愛宕の山を下向して、日本橋に着きにけり。馬より下り、樂阿彌は、暇申して、「賃取達、去らば〳〵」と手を打つて、四方へ散りてぞ失せにける。町の人々是を見て、「誠に樂阿彌とは、善くこそ名をば付けたれ」と、云はぬ物ぞなかりける。爰に有識の人、是を見て、「夫れ人間と生を得たらん甲斐には、如何にもして、世を遁れん事こそ、あらまほしけれ。法華經に、『諸々の苦みの寄る所、貪欲を本とせり』と說けり。此樂阿彌が境界、士農工商の者にもたづさはらず。樹下、石上、道路の辻を栖とし飢寒を忍び難

きゆゑ、町を廻り、貪る心有りと云へども、世に有る人の、甚だしきには勝りなるべし。扨又、『惡衣、惡食を愧づる事なかれ』と聖人宣へり。善には進み易く、惡には遠ざかる事なれば、世を遁れてこそ、道は求め易からめ。昔或る僧、高野山は、末世の隱所として、結界清淨の道場たりとて、此山に庵室を結び、誠に三會の曉を待ち給ふかと思ふ所に、此僧、『逃れても同じ浮世と聞く物を、如何なる山に身を隱さまし』、と是法々師の讀みし歌を、只何となく吟ぜしが、熟々と思ひ出でて、實に山は淺きに、隱家の深さや心なるらんと、山を出でて、諸國を行脚し、『それ世間の無常は、旅泊の歌に顯はれ、有爲の轉變は、草露の風

に滅するが如し。千里も遠からず。野に臥し、山に泊る身の、是ぞ誠の栖なる』と云へり。夫れ佛法を求る事、山林にも、市朝にも限るべからず。故に『小隱は山に隱れ、大隱は市に隱る』と云々、鴨の長明の方丈記に、『魚は水に倦かず。魚に非ざれば、其心を知らず。閑居の氣味も又同じ、住ずして誰れか悟らん』と申されし。されば、佛は、人間の樂しび、一代藏經に遍ねく記し置き給ふ。心地觀經に、「極樂非極樂、心有極樂」と有り。空也上人の歌に、『極樂は遙けき程と聞きしかど、勉めて至る所なりけり』、と千載集に見えたり。扨又、阿彌陀佛は是より西方十萬億度に、極樂淨土を構へ給ふと云へども、「去此不遠」

と說き給へば、此を去る事遠からず。又觀經に、『諸佛如來是法界、身入一切衆生心想中』、とあれば、「己身彌陀、唯心極樂」なり。あら有り難の樂阿彌が遁世。まめやかなる意樂や」

土風に江戸町騷ぐ事

見しは昔。江戸に土風絶えず吹きたり。されば龍吟ずれば、雲發り、虎嘯けば、風騷ぐ。此る例しの候ひしに、江戸に土風吹けば町騷がしかりけり。此風を、他國にては、旋風と云ふ。此字、めぐる風と讀みたり。又つむじの毛の如く、土を捲きて吹きければ、つむじ風とも俗に云ふ。治承年中六月十四日、都に旋風夥しく吹きて、人屋多く轉倒す。風は、中の御門京極の

邊より起つて、未申の方へ吹き行く。平門、棟門など吹き拂つて五丁十丁持つて行き、投げ打ちし、梁、桁、柱、木舞、榱などは、虛空に散在して、爰彼處へ落ち、人馬六畜、多く討ち殺されたる事、古記に見えたり。扨又、此風、土を穿つ故にや、關東にては、土抉と云ふ。萬葉に、「六月の土さへ割けて照る日」と讀り、土割るともあり。土抉りとはをかしき名なり。取分け、江戸近邊に吹く風なり。「草の名も、所に依りて替りけり。」と云ふ前句に、「難波の蘆は伊勢の濱荻」、と救濟付けられしも、今思ひ出だせり。されば藻鹽草に、風の異名、種々記せり。もし此内に、土抉りと云ふ風や有ると讀みて見れば、つしと云ふ風の名

あり。是は谷の河風なりと註せり。かなに書て、正字知れず。神風とは伊勢の國なり。依つて神風とは、神の御惠は、廣く限りなくして、大空の遍ねく際限なきが如くと云々。猶委しく十四卷神の所に記せり。山ごしも、ねごしも、風の名なり。海ごしとは風の名にて又名所なり。歌に、「海ごしの明石の松に音信て、もりさる舟も出づるとぞ思ふ」、と讀めり。沖の疾手、と云ふものも風の名なり。あなしは戌亥より吹く風。しぶくは海の嵐と註せり。しまきは横ぎる風なり。はやちは神の吹かせ給へる風なり。あゆの風は北陸道の風。時津風は四季の中に、何れにても一しきり暴く吹く風を云ふとなり。吹き吹けばと云ふても

風なり。歌に「吹き吹けば、山田の庵に音信て、稲葉ぞ人を守りあかしける」、と詠ぜり。あすか風、初瀬風、いかほ風、以上三つは名所の風なり。風祭りとは、「とわたる舟や幣をとらなん」、と讀みて、風神に祈りを懸くる、花にも詠ぜり。こち吹風、野分、木枯などは四季に吹く風なり。風の異名擧げて記し難し。是を數ふれば百二十あり。此外嵐の異名又多し。此内にも土抉りと云ふ風はなし。然るに江戸邊りに吹く土抉と云ふ風は、雲の氣色もなく音もせずして、俄に地より吹き立ち、土を捲き包んで、空へ吹き上ぐれば、只黑烟の如し。皆人是を見て、すは火事こそ出來たれ。燒立つ烟を見よと、騷ぎ轉倒する。町の

御掟の事なれば、家々より、手桶に水を入れ、引きさげ〳〵持ち行く事は、先立つて旗標を持ち、火本は爰や彼處と、走り廻る内に、土烟は消えて、虚事なりと云へば、提げたる桶の、手持もなく、旗を捲いて歸りしは、見てもをかしかりき。昔は江戸近邊、神田の原より板橋まで見渡し、竹木は一本もなく、皆野らなりしが、今江戸榮ゆくまゝ、四邊の野原、三里四方に家を作り塞ぎ、海道には眞砂を敷き、土の明き間なければ、土抉りは、何くをか吹くらん。町靜かなり。

勸進能見物の事

見しは今。江戸町繁昌ゆゑ、勸進能、毎月毎日懈る事なし。此

哀れを、誰か問はで有るべきと、老若男女、貴賤群集を爲して、目を悦ばしめ、餘りの面白さに、斧の柄も朽ぬべしと見物せしに、能七番あり。中にも哀れなるは、杜若、女の姿になり。業平の形見の冠唐衣を取り出だし、古へを語るこそ不便なれ。卒都婆小町、百年の姥となり。乞食の有樣哀れなり。又舟辨慶に、平の知盛、幽靈に成りて、義經を海に沈めんと、夕波に浮び出でて戰ひ給へる、怨念の痛はしさよと、涙を流し、袖を絞らぬはなかりけり。爰に春庵と云ふ知人、愚老泣くを見て、嘲ら笑ふ。「我れ少し氣に懸り、腹立つまゝに、其方心強くして、哀れも知らず。返つて笑ふにや」と云へば、春庵聞きて、「昔が今

に至るまで、草木物云ふ事なし。人死して二度歸らず。今日の能には、卒都婆小町、一番誠の事を作りたり。小町は美人にて、諸人に戀ひられしかども、百年の老婆と衰て果てゝ、關寺の邊を乞食し、一世の愧を曝したるこそをかしけれ。夫れ能と云ふ事は、世間の慰み、笑草を作り、虚事を歌ひ、眞似を爲す所に、誠と思ひ、皆人泣く事、魚鳥にも心劣りたり。魚鳥を捕らんとて、釣に餌をさし、網を張り、罟の傍りに餌を蒔き、誑かれども、誠と思ふ魚鳥は、千の内に一つ、九百九十九は、人の誑かりと知りて、捕られずと云ふ。我れ聞きて、誠に道理至極せり。人は、怜悧く、魚鳥は愚かなりと思へども、捕るは少なく、捕られぬは多し。扨又能を見て、愚かに泣く者は、千人が中に、九百九十九人。賢にて泣ぬは、春庵一人なり。實に草木如何で人とならん。死にたる人、二度歸るべからず。我も人も泣きつる涙益なし」と云へば、老人聞て、「春庵は、世間の風流をも知らざる無道人なり。されば昔唐土に、鹿戀春女と云ふ女あり。女を一人持てり。此女子、身去りて、後、塚に一夜の程に、草一本生ひたり。母、是を見るに、別れし女子の、媚さたると見て、急ぎよりて見れば、女にはあらず。草なり。夫れにより、此草を女郎花と名付く。郎の字を形と讀み、女をむすめと讀む事、此理由なり。古へ、草木顯はれ、人に言葉を替し、人、死して

露魂現ずる事、内典、外典に、多く記せり。夫れ謠は、世の風俗として、心有る人、優しく作れる、其哀れをも知らず、難ずる事、只蚊虫に異ならず。其上春庵、小町が姿を笑ふ事、物を知らず、小町は、妙音菩薩の化身とこそ、古き文にも見えたれ。日本紀に、小町は、小町良實が娘なり。十三の年、嵯峨の帝に參りて、采女の役を勤めけるが、眉目並ぶ人なし。嵯峨の天皇の后の列に御定めあり。十七にして、女御に參る所に、父の良實に後れぬ。明る年の春、一周忌過ぎて參るに御定め有りしに、兄に後れぬ。又明年の一周忌過ぎて參るべかりしに、御門崩御なり。是不吉の事なりとて、大内を出だされ、都の内に、好色の女

と成りて、業平と行逢ふて、程なくかれ〳〵に成りければ、其後、北山の獵師に相具して、世を渡る業なかりければ、後は三井寺邊を乞食し、哀れなる有樣なり。六宮の數に入り、十善の位に備るべき身が、左もなくて、百年の姥となり。關寺の方に惑ひ歩行き、蓮台野の邊りにて身去り、道の邊に首を曝す事、是世間の無常、幻しの仇なる色を、知らせん爲めの方便なるとかや。高野山の僧も、「煩惱即菩題」と云へる法問を聞きて、誠に悟れる非人佛なりとて、頭を地に付け三度禮し給ひたり。小町を笑ふ事愚かなりと云ふ。春庵聞きて、「煩惱即菩題」の法問有り難や。出離を求むる智識は、卒都婆小町の謠なり。善惡不二

の理を得たり」と云へり。

屏風齋心まがる事

見しは今。江戸町に、屏風齋と云ふ人有り。此人云ひけるは、「我が心、元來より曲りたり。されば七尺の屏風も、曲るに依つて正道なり。是を直に立つれば、曲つて倒ぶ。我が心全く屏風に等しさがゆゑ、屏風齋と名付く。淨名經に、『衆生無始より常に曲つて直ならず』と說かれたり、或る人、貴き能化に問ふて曰く『如何なるが是本來の直』、道師答へて、『恒河九曲』と云へり、是尤も衆生なり。然るに世上の人は、直顏にて、心曲れり。我は曲つて返つて心直なり。世は皆醉へり。我れ獨り醒めり」

などゝ利口を云ひ、常の家風、賢人がましくして、靈相を學び、自慢顏せり。老人是を聞きて、「言葉の漏し易きは、禍を招く媒なり。言葉を愼まざるは破れの道なり。共上曲直は、其品にこそ寄るべけれ、實に此人、醉ふて覺めざるに似たり。王光祿は、屏風の如し。屈曲して俗に從ふ。よく風露を被ふと云へり。此心は、我が身を曲げて、時に從ふ故に屏風の如し。曲らぬは、世に立たれぬと云ふ義なり。聖人の例へ此の如し。屏風齋、宏才利口に有りて、唱ふる事は、誠なりと云ふとも、身の行ひなくして、如何で賢人と等しからんや。論語に、『仁者は山を樂しび、智者は水を樂しぶ』と云ふて、山水靜動心に有るのみにあ

らず。天地萬物悉く備れり。其身直にして影曲らず。其政正しくして國亂るゝ事なし。古德も、『益者三友』を明せり。內典には、『善友親近第一とす』と說けり。曲れる心も敎へに從はば直なるべし。尙書に、『木繩に從ふ時は正しく、君諫めに從ふ時は聖なり』と云へり。例ひ敎へなく學ばずとも、善惡は友に寄るとも見えたり。善友に伴ふは、麻の中の蓬の直さが如し。惡友に近づく者は、荊棘の中の薔薇の如しと云へり。宗祇、都の會所を預り給ふ祝詞の發句に、『世に立つも麻に交はる蓬かな』、とせられしこそ殊勝に思ひ侍れ。『其人を知らずんば其友を見よ。其君を知らずんば其臣を見よ』と、孔子は云へり。惡人

の眞似とて、人を殺さば惡人なり。舜を學ぶは舜の德なり。賢愚曲直其行ひに從ふべし。然る時は、人は賢に觸れて賤しきに觸るゝ事なかれ。花中の鶯舌は、花ならずして芳し」と云へり。

歌舞妓踊の事

見しは今。江戸に流行物品々有りと云へども、吉原町の歌舞妓に若くはなし。されば昔祇王、祇女、佛御前など、云ひて、舞曲、世上に名を得し美女有りしが、女の形其儘にて、白き水干を着て、舞ひければ、白拍子と名付け、優にやさしく候ひしとなり。唐土には、虞氏、楊貴妃、王昭君など、皆白拍子と聞え

たり。扨又慶長の比ほひ、出雲の國に、小村三右衞門と云ふ人の娘に、國と云ひて、形優に、心ざま優しき遊女候ひしが、柳髪風にたをやかに、桃顏露を含める風情、舞曲花めきて、百の媚を爲せり。音聲雲に響き、言葉玉を列ね、春風暖にして、聞く人までも、覺えず栴檀の林に入るかと怪しまる、此遊女、男舞歌舞妓と名付けて、髪を短かく切り、をり髷に結ひ、鞘卷を指し、小野對馬守と名付け、今樣を歌ひ、舞女の譽れ世に越え、顏色無雙にして、袖を飄へす裝ひ、見る人心を惑はせり。夫れを見しより此方、諸國の遊女、其形を學び、一座の役者を揃へ、笛、太鼓、鼓を鳴らし、鼠木戸を立て、是を諸人に見する

中にも名を得し遊女には、佐渡島正吉、村山左近、岡本織部、小野小太夫、でき島長門守、杉山主殿、幾島丹後守などゝ名付け、是等は一座の頭らにて、歌舞妓のをしやうと云へるなり。扨、中橋にて、幾島丹後守歌舞妓有りと、高札を立つれば、人集つて貴賤群集を爲し、出るを遲しと待つ所に、をしやう先立つて、幕打ち上げ、橋掛りに出るを見れば、いと花やかなる出立ちにて、黄金作りの刀脇差を差し、火打袋、瓢簞など、腰に下げ、猿若を伴に連れ、そゞろに立ち浮かれたる其姿、女とも見えず、只まめ男なりけり。古へ陰陽の神と云はれし業平の面影ぞや。芝居棧敷の人々は、首を延べ、頭を叩いて、我れを忘れて動搖

する舞臺に出づれば、いとゞ猶、近增りする顏容は、誠に揚貴妃、一度笑めば、六宮に顏色なしと云へるが如し。芙蓉の外眦、丹花の唇、花を飾りたる形、是を見ては如何なる塔の澤に引籠り、念佛三昧の、かふろ上人、天臺山四明の洞に、一心三觀を宗とし給ふ南光坊なりとも、心迷はでは候はじ。秘曲を盡す舞の袖、容顏美麗に優しさは、義經の思ひ人、舞の上手と聞えつる磯の前司が女子、靜御前や、唐土の皇帝の戀ひ給ひし大織官の乙姫も、是には如何で優るべき、此るいつくしき立恣に、見惚れ迷はぬ人は、たゞ鬼神より猶怖ろしや。其外、花を妬み、月を嫉む程の女房、同じやうに裝束せさせて、齡二八ばかりなる

が、眉目形、書に書くとも筆に及び難き程なるが、花の袂を重ね、玉の裳裾を列ね、五十人、六十人、好色を事とし、花車なる花の色衣に、眞那盤、古伽羅、紅梅伽羅を焚きしめし、歌舞妓、踊りて、一同に袂を返す扇の風に、匂ひは四方に香ばしや、春の園生に蝶鳥の、散りかふ花に浮かれつゝ、潑と立つては入り亂れ、左右に分てる舞の袖、是や五節の舞姫も、此やとこそは思はるれ。史記に、「長袖善く舞ふ、多錢善く商ふ」と云へるも思ひ知られたり、扨又、床机に腰を懸け、並び居つゝも連三味線、歌をあけてはかき返し、今樣の一ふしかや、「夢の浮世に只狂へ、とゞろ、とゞろと鳴る雷も、君と我れとの中をばさけじ」と、

中に、をしやうの舞遊ぶ、姿優しき花の曲、是や誠の天人の遙迎あるや。「天津風、雲の通ひ路、吹きとぢよ、乙女の姿、少時止めん」と、名殘を惜む舞歌の曲も、早入り相に成りぬれば、皷、大皷や、笛の音の、拍子を合する足踏みに、心は空に浮れ男、今生は夢の浮世なり、命も惜しからじ、財寶も惜しからじと、貴賤老若、此道に好きて、惚れ人となれり。古語に「一度顧る時は城を傾け二度顧る時は國を傾くる」と云へり。されば佛は「一念五百生、けぬん無量刧」と說けり、又寶積經に「一度女人を見れば、眼の切德を失ふ、例ひ大蛇をば見るとも、女人をば見るべからず」との戒めなり、扨又外面は菩薩にて、

內心は夜叉の如しとも說かれたり。誠に女の面は菩薩に似て、心は鬼なるぞや。伊勢物語に「むぐら生ひて荒れたる宿のうれたきは、かりにも鬼のすだくなりけり」と讀みしも、女を鬼と云へるとかや、男を迷はす魔王なれば、女に心許し給ふべからず。

慶長見聞集卷の六

江戸町の水道の事

見しは昔。江戸町の跡は今大名町に、今の江戸町は、十二年以前まで、大海原なりしを、當君の御威勢にて、南海を埋め陸地と爲し、町を立て給ふ。然るに、町豐かに榮ゆるといへども、井の水へ鹽さし入り、萬民是を嘆く。君聞し召し、民を哀れび給ひ、神田明神山岸の水を、北東の町へ流し、山王山本の流を西南の町へ流し、此二水を、江戸町へ遍ねく與へ給ふ。此水を味はふるに、只是藥の泉なれや。五味、百味を具足せり。色に

染みてよし。身に觸れてよし。飯を炊ぎてよし。酒茶によし。「夫世間の水は、必ず大海に入る。一切の善は、必ず法性に歸す」と云々。此水大海へ入らずして、悉く人中に流れ入る。元來此水は、明神、山王の御方便にて、氏人を哀れみ、湧き出だし給ふと雖も、人是を知らず。其上此流の中間に惡水有りて、流を汚すにより、徒らに水朽ちぬ。然るに今逢ひ難き君の御惠みにより、中間の濁水を除き去つて、清水を萬人に與へ給ふ。古語に「仙宮の水清けれども、山烏流を汚す」と云々。仙宮より流れ出づる河は、仙人集つて仙藥を洗ひ濯ぐ故に、河流を汲む者まで長命なり。所に其川の中間にかけ山の烏、其流を浴ぶる時、

水却つて毒と變ずと云へり。新續古今に、「君をこそ神も哀れと石清水、外より出でぬ流と思へば」と詠ぜり。「誠に流を汲んで水上を知る」と云へる、古人の言葉思ひ當れり。其上、日本國の人遍ねく此水を味はへり。神と君、慈悲平等の御心より流れ出る清水、誰か渇仰信敬せざらん。傳へ聞く、古へ後漢の武師將軍は、城中に水盡き、渇に責められける時、刀を岩石に刺しゝかば、忽ち泉湧き出、人民命をつぎたりしに、江戸の流ことならずや。扨又昔、藥の泉出來たる例し有り。雄略天皇の御宇に、美濃國本巣の郡(多藥郡の誤)に、不思議なる泉湧き出づる。老いたる者、此水を飲みぬれば老を忘れ、若きに歸る。心潔く、夜の寢覽

もなく、老を養ふゆゑ、養老の水と名付けたり。況んや、若き身に、藥と成りて、命長く榮え、萬民樂しびあへり。今天下太平、目出度御時代なれば、仙家の水の流を汲み、皆人一舌の上に、萬德の藥味を嘗め、壽命長遠ならん事を悦びあへり。

江戸にて金の判改まる事

見しは昔。江戸町にて、金に判する人、四條、佐野、松田とて此等三人なり。砂金を吹きまろめ、一兩、一分、一朱、々中なゝ、目をも、判をも紙に書付け、取渡する事、天正十八寅の年より、未まで六年用ゐ來る。此判自由にあらずとて、後藤庄三郎と云ふ人、京より下り、同じ未の年より、金の位を定め、

一兩判を作り出し、金の上に打判有りて、是を用ゐる。又近年は一分判出來て、世上に遍く取扱へり。されば愚老若き比は、一兩、二兩道具のはづし金を見ても、稀れ事のやうに思ひ、五枚、三枚持ちたる人をば、世にもなき長者、有德者などゝ云ひしが、今は如何やうなる民百姓に至る迄も、金を五兩、十兩持ち、扨又、富限者と云はるゝ町人連は、五百兩、六百兩持てり。此金、家康公御時代より、諸國に金山出來たり。又萬民金持つ事は、秀忠公の御時より取扱へり。其昔金は、奥州より出來初りぬ。然るに出羽陸奥の押領使鎮守府將軍藤原朝臣基衡は、世に超えたる福德の人なり。奥州平泉に、廣大なる堂塔を建立し、貯

へ置きたる珍寶を殘さず、皆佛師雲慶に取らする。鷲の羽、安達絹、狹布の細布、信夫文字摺、白布、糠部の駿馬、七間眞中ある氷豹の皮六十枚、生しの絹一品ばかりを、舟六艘に積みて渡す。其註文、第一に砂金百兩と記せり。其頃までは、金稀なりと知られたり。扨又頼朝公、天下を治め給ふに依つて、基衡が子息秀衡入道、出羽奥州の年貢と號し、金四百五十兩、鎌倉殿へ奉る。頼朝公、御覽有りて、希有に思し召し、喜悦斜めならず、此内を急ぎ御門へ進ずべき由仰せなり。建久元年十一月十三日頼朝公上洛のみぎり、三井寺、平家の爲めに、一宇も殘らず、灰燼となる。青龍院は、八幡殿の、殊に御さゝやうし

給ひ、御髪をうづまるゝと云々。是に依つて、此寺の修理料として、十二月八日、頼朝公、御劍一腰、砂金十兩施さしめ給ふ事を記せり。ていれば、建久四年みづとの丑十月十一日、鎌倉中の法度を定めつる文に、「○炭一駄代錢百文、○薪一駄卅束、但三ばづけ代百文○かやぎ一駄八束代五十文○藁一駄八束代五十文○ぬか一駄代五十文、件の雜物近年高直にして法に過ぎたり。賣人に下知すべき者なり」と云々。是は天正（慶長歟）十九年當年まで、三百六十二年以前の事なり。今の賣買に較ぶれば、錢の價は少しも替らず、昔金一兩の代に米錢の沙汰古き文をも見ず。天正年中の比、金一兩の代に、米は四石、永樂は一貫。

但し鐚四貫に當る。是は三十餘年以前の事なり。其比金一兩見るは、今五百兩千兩見るよりも稀れなり。然れば今は國治り、民安穩の御時代、皆人金澤山に取り扱ふといへども、價は古今同事にて、目出度寶なり。夫黃金の正體は、打つても碎きても、火に入り水に埋もれ、萬刧を經るとても、色性替らず。かるがゆゑに、佛を金剛不壞の正體とは云へり。

慶長見聞集卷の七

初雪を常に詠むる事　付　役行者の事

見しは、今。江戸の境地、山海の眺望比類なかりけり。中にも、「見る度に珍らしければ、富士の嶽、何も初雪の心地こそすれ」、と口すさび、僧士の古風思ひ出侍りぬ。夫れ世に人の賞翫し給ひける、色品々の風流限りなしといへども、中には雪月花こそ、別きて殊なる詠めなれ。されども雪は消え、月は缺け、花は移ろひ、常ならずして、人の心苦しめり。されども、富士の雪は時を知らずと思ひしに、古歌に、「富士の根に降り置く雪は、六月

の十五日に消ぬれば其夜降りけり」、と讀みたれば、さもやと思ひ詠むるに、十五日にも消ゆる間なし。新千載集に、「消ぬが上に珍しげなく積るらし。富士の高根に今朝の初雪」と詠ぜり。昔、氷室の雪を、御門へ御調物に奉る。是を主水受取る。富士、丹後の頂山、山城の松が崎より上る。古歌に、「氷居て千年の夏も消せじな。松が崎なる氷室と思へば」、と詠ぜり。扨又建長の比ほひ鎌倉に於て、六月炎暑の節に當りて、富士の雪を召し寄せ、珍物に供へ給ひしが、民の煩ひとて後やめられたり。鎌倉より富士見えぬる故なり。されば頼朝公の歌、勅撰に多く見えたる中に、後撰集に「富士の根をよそにぞ聞きし。今は我が思ひ

にもゆる烟なりけり。」新古今旅の歌に「道ずがら富士の烟も分かざりき。晴るゝ間もなき空の氣色に。」此二首は前の右大將頼朝の詠じ給ひぬ。今江戸に住む人は、家を南向に作り、西へ窓を開け、高嶺の雪を居ながらに、明暮絶えぬ詠めせり。「晴れたる雪は夏の富士の根、」と云ふ前句に、「武藏野の綠の末や天の原、」と智溫法師付け給ひぬ。續千載集に、「言の葉も及ばぬ富士の高根かな。都の人に如何に語らん」、と讀めり。三國無雙の名山。都人東に下り、時知らぬ山の雪を見て、目を驚かし給へるも道理なり。さんねる年、八條殿江戸へ御下向、富士を見給ひて、「唐土の歌にありとも見せばやな、誠の富士の山の姿を」、と讀み給ふ。玉

葉集に、「目にかけて幾日になりぬ。東路や、三國を堺ふ富士の柴山」、と詠ぜり。此山、三州の間に在り。扨又萬里が詩に、「皆雪にして雲なし。天夫れ峯、夏寒うして常住冬を知らず」、と作れり。此山は、人王七代孝靈天皇の御宇に、一夜に湧出せしとなり。又或る說に、此富士の山は、人王二十二代雄略天皇の御時、一夜に出來たり。高さ一由旬なり。雲霞にかくれ、見付けたる人なかりしに、人王四十二代文武天皇の御宇に、役の行者見付け、此山を踏み初め給ひしより此方、皆人登る。中空より下は金輪際より出、中空より上は天より降りたり。然る間天地和合の山といへり。文人、歌人、此山を譽めて作られし事、舉

げて數ふべからず」と云へば、老人聞きて、「此役の行者は、舒明天皇六年甲午正月朔日誕生す。大和の國葛城上郡卯原村の人、俗姓は賀茂氏なり。三歳の時父に後れて、七歳までは母の惠みにて成人す。孝子の志淺からず。童子の名をば小角と云ふ。五色の兎に隨つて、葛城山の頂に登り、藤衣に身を隱し、松の翠に命をつなぎて、孔雀明王の法を修行する事三十餘年、りうし菩薩に逢ひて、五字三密の法水を傳へ給へり。伊駒、二上嶽、大嶺を行廻り、葛城山の岩屋に有りて、秘法を行ひ給ひし時は、鬼神を使者とし、水を汲ませ、薪を取らせ、唐土へも渡りけるにや。道昭和尚、勅を請ふて、法を需めに、唐へ渡りし

時、行者に逢ひたりと云へり。葛城一言神の讒言により、伊豆の大島へ流されては、海の上を歩行き、富士の高嶺に通ひ給へり。昔、羅漢たち、水歩の履を穿き、水上を渡りたる事をこそ聞傳へたれ。行者此る不思議有るにより、御門聞こし召し、急ぎ勅使立て、都へ召し返されたり。日本に於て壽命の人なりと云へり。（後撰集の歌は朝頼朝臣の歌なり頼朝とするは原著者の誤なり）

夕顔の宿りの事　付　江戸屋形作りの事

見しは昔。當君武州江戸へ御打入りは、天正十八寅の初秋なり。其頃までは、高さも賤しきも、松を柱、竹の編戸、むぐらの庵蓬が宿、草葺の小屋がちなる軒の妻に、咲きかゝりたる夕顔の白

き花のみにて、蚊遣火のふすぶるも、哀れに見えて多かりし。

さて又、光源氏の古へを、六十帖に委しくあらはせり。蓬生の巻には、源氏蓬生の宿へ通ひ給ふ事を書けり。源氏の御歌に、

「尋ねても我れこそ問はめ、道もなく、深き蓬の本の心を」、と讀み給ふ。故に未摘花を、蓬生の宿と云へり。狐の栖と成りて蹄ましう、ふくろふの聲を朝夕耳ならしつゝと書けり。又夕顔の巻には、源氏の思ひ人、夕顔の花の咲きたる宿に御座しけるより、夕顔の上と申すなり。「折りてこそ夫れかとも見め黄昏に、ほの〳〵白き花の夕顔」、などゝ詠めさせ給ひて、五條夕顔の宿へ通ひ給ひし。慈鎮の歌に、「賤の男が烟りいぶせき蛟遣火

に、すゝけぬ物は夕顔の花」、拾遺風體抄に見えたり。古へは、いと物哀れなる事ども有りしぞかし。扨又中昔の事にや有りけん。或る人繪書を頼み、繁昌の家居、又侘しき庵の體を好みければ、望みに任せて家を勇々しく書き、棟に庭鳥のあがりたる體を書き、又草の庵に夕顔の這ひかゝり、佗びしき體を書きしとなり。今江戸町の家作りを見れば、二階三階の、とちぶき、瓦葺にて、軒高ければ、庭鳥の羽は中々及びなし。棟には鳶、鷲、鴻などが巣をかけて見ゆる。扨又諸侯大夫の屋形作りを見るに、只小山の並びたるが如し。棟、破風、光り輝き、其内に、龍は雲に乗じて、海水を捲き上げ、孔雀、鳳凰は、翼を並べて

舞ひ下る。是を振り放け見んとすれば、天津光うつろひ、まばゆくして、其形定かに見え難し。軒の廻り、門の邊りには、虎が風に毛を震ひ、獅子がはかしらする風情、誠に生きて活くかと、身の毛よだち、傍りへ寄り難し。此る廣大なる御時代にも逢ひぬる物かな。

諸國に金山有る事

聞きしは昔。日本にて黄金見初めし事は、人王三十四代推古天皇の御宇、十三年乙丑の歳、高麗國より、初めて渡りたり。扨又我が朝にて、黄金掘り出す事は、人王四十五代聖武天皇の御宇天平勝寶元年巳丑の年、奥州より、始めて御門へ奉る。銀

は人王四十代天武天皇の御宇、三年甲戌の歳、對馬の國より始めて捧ぐると、何れも古記に見えたり。されば大和の國に、金の御嶽と云ふ名所有り。古歌に、「我が戀の金の御嶽の金ならば、彌勒の世にも逢はまし物を」、と詠ぜり。又、「白銀の目貫の太刀を提げ帶きて、奈良の都を練るは誰が子ぞ」、と讀みしぞかし。彼樣の道理を開きしに、昔は、黄金銀稀なりと知られたり。然る處に當君の御時代には、諸國に金山出來、金銀の御運上を、牛車に引きならべ、馬に着け並べ、毎日怠らず。なかんづく、佐渡島は、只金銀を以て築き立てたる寶の山なり。此金銀を、一箱に十二貫目入れ、合せて百箱を、五十駄積みの船に積み、毎年五

艘十艘づゝ、能き波風に、佐渡島より越後の港へ着岸す。是を江城へ持ち運ぶ。おびたゞしき事、昔を例へてもなし。民百姓までも、金銀を取り扱ふ事、有り難き御時代なり。金の御嶽の歌の心なれば、誠に今が彌勒の世にや有るらん。佛の世ならずば、萬民何で樂しまん。千世萬世も久しかれとぞ申しあへり。

江戸町の道泥深き事

見しは今。江戸町の道、雨少し降りぬれば、泥深うして往來安からず。さる程に、足駄の歯の高さを、皆人好めり。猩々は、酒履を好み、江戸の人は、沼履を好む。人、猩、替れども、用ゐる所は、和漢殊ならず。比しも春なれや。燕際限なく飛び來

りて、道のぬかりを運ぶ。されば靈陵山と云ふ所に、石有り。雨降れば其石燕と成りて飛び、晴るれば又石と成るとかや。歌に「降れば鳥、降らねば本の石となる、雨は燕の涙なりけり」、と詠ぜり。扨又、「見れば燕の一つれの聲」、と云ふ前句に、「石を打つ雫も深く降る雨に」、と宗尹付け給ひぬ。演雅の詩に、「燕は居所なくして輕飛する事急がはし」と云々。愚老徒然のあまりに、一燕幾らの家を作るとも、道のぬかりは運びつくさじ」、と口吟み、海道を詠め居しに、通る人を見れば、新らしき小袖に、折り目高なる上下を着、道のぬかりを、たどり行きしが、荷負ひ馬に磕と行き逢ひ、蹴上の泥を厭ひ顔にて、「あなや〳〵」と

云ひて、急ぎ傍らへ除けんとせしを、馬方是を見、徒ら者にて、馬に鞭を礑とあつる。此馬驚き、はねければ、泥水を此人に思ふ儘にぞ浴びせたる。糊強なる上下も、泥染となり、打萎れ、見ともなき有り様は、高野證空上人の、京へ登る道にて、馬の口引きたる男に行き逢ふて、堀へ墜され、腹あしく咎めしも、是には若かじ。此人腹を立て、「惡い奴めの馬の追ひやう哉、此穢れたる、衣裳上下を辨へさすべし」と叱る、馬方聞きて、「あらをかしの人の腹立や。物も云はざる畜生を敵手になしての雑言かや。御身は衣裳美々しく、衣紋けだかく引繕ひ、上下を着て、人體がましく見えけるが、馬、車にも乗らずして、泥を厭ふの

をかしさよ」と、手を打ちたゝいて笑ひ行く。此人聞きて、いとゞ腹は立ちけれども、徒ら者の馬方を、敵手に爲すべきやうもなし。夫より辛く見えけるは、往來の人が立止まり、「やれをかしや。泥まみれの男を見よ」と、群集して、指をさして嘲笑ひ、海道に立ち塞がり、少時は通路ぞなかりける。此人腹を据ゑかねて、四方を睨らんで云ひけるは、「泥によごれたる我が姿が、をかしく有りてや笑ふらん。敵手に主は嫌ふまじ」と、刀を拔いて切つてまはり、死なんと云ひて狂ひければ、見物衆は肝を消し、周章ふためき、逃んとするに、木履、足駄にまとはつて、一人轉ぶぞ最后なる。四五百人の見物衆が、人の上に人が重なり、

臥しつ轉びつ。起き上らんと、泥にまみれて足掻けども、皆垂頭に重なりて、頭も擡げず、尻も上らず、泥の中へ面を突き込み、手足にて泥をこねかへし、一人々々這ひ上る姿を見れば、土にて作りし辻地藏の、雨に打たれて淺猿げに、眼ばかりぞきらめきける。少さき子どもは、上より押され、泥を口より飲み入れて、息を得せねば皆死にたり。親兄弟は、是を取り上げ、泣き悲める有り樣を見るに、かはゆくも有り。をかしくも有り。此る仕合せ候ひけり。扨其人は、先へも行かず、跡へも歸らず、面目なげに立ち煩ひ、生き甲斐なくぞ見えにける。「萬の猛虎には逢ふとも、愚人の一怒には逢はざれ」と云へる、古人の言葉

思ひ知られたり。大日經に、「一念の嗔恚には、俱底刼の善根を燒き失ふ」と說かれたり。去れば他人の過ちを見ては、却つて身の上を愼むべき事なり。凡そ、大事は小事より起ると、貞觀政要に見えたり。「道の惡しき時分、荷負ひ馬に逢ひなば、遠く除くべき事なり」と皆人云ふ。年寄りたる翁、海道を通りしが、此山を聞き、立ち留まつて云ひけるは「いや〳〵用心するとも、過去の業因は逃るべからず。人に惡しく當れば、必ず後の世に、夫が爲めに仇を受く。生有る物を殺せば、必ず後の世に己れ害せられぬ。昔、天竺に大王有り。尊き上人有ありて、迎ひを遣はさる。此王、明暮、碁敷寄にて、臣下を集め、打ち給ふ時、

『上人參り給ひぬ』と申すれば、禁に切り手あるを、『切れ』と宣ひけるに、此上人の首を斬れとの宣旨と聞なして、則ち聖の首を討ち切りぬ。碁果て、、『其上人此方へ』と宣ふ。宣旨に任せ、聖の首を切りたりと申す。大王大きに悲しび、佛に歎かせ給ふ時に、佛の宣く、『昔、國王は蛙にて土中に有り。上人は本農人なり。然るに春田をかへす時、心ならず唐鋤にて、蛙の首を切りぬ。其因果逃れずして切られぬ。因果は彼樣なる物ぞ』と敎へ給ふ。扨又、彼の兩人の亂逆、元來を伺ひ見るに、馬追ひは、古へ奥州の、金賣吉次が小冠者九郎義經の變化、泥まみれの男は、平家の侍關原與市なり。因果逃れ難し」と云ふて

過行きぬ。皆人聞きて「實にさもやあらん」と、笑ひて退散せり。

角田川一見の事

見しは今。天下治り、目出度御代なれば、公家殿上人までも、遍く江戸へ下り給ひぬ。此都人云ふ、此邊に角田川とて音に聞えし名所あり。武藏と下總の堺を流れぬ。古へ在原中將、二條の后に參りし事、大君に漏れ聞え、遠流の身と業平は、東國角田川に來りぬ。此河の邊りに、京にては見なれぬ鳥有り。渡守に問ひければ、『是なん都鳥』と云ふを聞きて、『名にし負はゞいざ言問はん都鳥、我が思ふ人はありやなしやと』、と讀みしぞかし。新古今に、『覺束な都に住まぬ都鳥、言問ふ人にいかゞ答へし』、

と讀めり。俊成卿の女の歌に、『古への秋の空まで角田川、月に言問ふ袖の露かな』、と詠ぜり。『沈むや魚の見えず成り行く、』と云ふ前句に、『名もしるき鳥の浮べる角田川』、と宗長付けたり。昌休、東國一見の時、角田川の邊に至りて、『秋風や言問ふ舟の渡守』、とせしとかや。歌人は居ならが名所を知るといへども、如何で見る程には有るべきぞ。東へ下りての思ひ出、何か是にはまさらんと、此名所を一見し給ひ、近衛殿の御歌に、『答へせば我が出でてこし都鳥、取り集めても言問はましを』、と讀み給ふ。八條殿、『角田川住むてふ鳥の名にし負ふ、都人もや絶えず來ぬらん』。又三條中納言、『角田川來る人ごとに昔より、言葉の花の

都鳥かな』。阿野宰相、『吹風も治れる世に角田川、渡さぬ隙や波の舟人』。又莊嚴院、『書き流す水の哀れの古へを、見れば衣の角田川かな』。玄仍の發句に、『盛りかと問はばや花の都鳥』。昌琢、『名にし負はばかすまじ月の角田川』、と申されし。諸人の詠、擧げて盡し難し」。然るに、龜や道閑と云ふ京の知人、當年初めて江戸へ下りしが、「音に聞きし角田川の名所、如何やうなる面白き事や有る」と問ふ。總じて、何れの名所も面白き事はあらねども、舊跡をば、詩人、歌人尋ね給へり。扨又、角田川の寺の庭に、謠に作りたる梅若丸の塚有りて、標の柳有り。見物衆は塚の四邊の芝の上に圓居して、歌を誦し、詩を作り、酒もりす

る所に、此寺の坊主大上戸にて、爰や彼處の酒宴場へ飛び入りて、五盃、十盃つゞ呑む事、數を知らず。何よりもをかしきは、此坊主、角田川の謠、きり、はしを、一ッ二ッ覺え、平家とも舞ともわかず、稱名ぶしに、打ち上げてうたふ。されども短かくうたふに興有りて皆人笑ふ。道閑聞きて、「我れ上戸なり。いでさらば角田川へ行き、其坊主と酒宴せん」と云ふ。我れ聞きて、「其方角田川見物成るべからず。此坊主、初めて一見の人を善く見知りて、歌を所望する。善くも惡しくも、文字さへつゞき讀みぬれば喜ぶ。讀まざれば、惡口を吐き、寺の四邊を拂うて追ひ出し、當座の恥辱を與ふる。其方は宏才利口たりといへども、

歌の道をば、文字の數をも知らず。思ひ止まり給へ」。道閑閉口し、熟々案じ、此名所見ずば、京の知人、我が心拙しと云はん。其上思ふ子細有り」と、小舟に棹さし角田川へ行き、寺の庭なる梅若丸の塚を見物する所に、案の如く坊主出逢ひて、「旅人は都の人と見えたり、當地初めて一見の人々は、善くも惡しくも押し並べて、歌を讀ませ給ひぬ」と、硯、短冊紙を持出でて、頻りに所望す。道閑曰く「都の者を善く見知り給へるの奇特さよ」と、臆せず筆を取り、「梅若丸の塚柳角田河原の涙かな」、と書きて坊主に見する。此坊主、歌讀むやうは知らねども、發句と歌文字の數をば覺えたり。此句を讀みて指を折り、又ほぐして

は指を折り、少時案じて云ひけるは、「如何にや都人。此句の文字を數ふるに、發句には七文字多し。歌には七文字足らず。不審なり」と問ふ。道閑答へて、「是は歌にあらず。發句にあらず。扨又長歌にあらず。短歌にもなし。此頃都に流行りし中歌なり」と云ふ。坊主聞きて、「田舍者左樣の事を知らずして、尋ね申すこと面目、灰にまびれたり」と云ふ。道閑聞きて「知つて問ふは禮なり」と云へば、「左樣にも全く存ぜず」と返答する。京田舍人の出會、珍らしきあいさつ、聞捨てがたく記し侍る。

寒嶺齋眞似賢人の事

見しは今。寒嶺と云へる人、近年江戸町に有りしが、此人心は

拙くて、外見更に人に似ず。遍へに異相を學び、才智利口に有りて、云ひけるやうは、「伯夷、叔齊、武王に仕へず、首陽山に入つて蕨を食ふ。麻子が云ふ、「君達は如何なる賢人なれば、山溪を愛するや」。伯夷が云ふ、「武王不義なる故に、周の粟を食せず、蕨を食す」と云ふ、麻子が云はく、「普天の下王土にあらざる事なし。率土の民王臣にあらずと云ふ事なし、何んぞ蕨を食するや」。是を聞きて二人蕨を食せず。七日の内に餓死す。是を麻子がせめと云ひ傳へり。其昔傳へ聞く、賢人多しといへども、此く心愚かにして、餓ゑ死にたる者を、末代に至つて、賢人と沙汰する人、是又、伯夷、叔齊と同じき愚痴の人なり。小陰は陵

藪にかくれ、大隱は朝市にかくる。されば、「心深くも身を隱す山」、と云ふ前句に、「花咲けば憂世の人に成り果てゝ」、と宗祇付けられたり。此句誠に世を捨てたる句なり。世を逃るゝ事、只我が心に有りと云ふて、或る時は詩を作り、或る時は枯木に花の咲くやうなる物語のみせり。故に此人を賢人と云ふ。老人聞きて「愚かなる云ひ事ぞや。大才博學に、書を覺え、詩文を作り、辯舌たれる計にて、賢人とは心得べからず。世說に云ふ、『褚季野物云はずといへども、四氣の氣又備はる』と云々。季野は輕々と物云はぬ人なれども、心中に分別の辨へ有り。胡曾が詩に、『首陽山は倒れて平地となるとも、伯夷、叔齊賢名は失

すべからず、是誠の賢人なり』とこそ作りたれ。先哲の言葉にも、『外に賢善精進の相を顯はす事を得ざれ。內にこれをいだけばなり』と云へり。」此人寒嶺と名付けたりしは、傳へ聞く賢人寒山に均しきとや。寒山拾得は散聖なり。唐土に出生、文殊、普賢の化身。何で恐れざらんや、外相廉直にして、賢相を學ぶと云へども、心は奸賊たり。心事境界寂ずして、賢人と云ひ難し。左樣の家風にこそ、等閑の言句も美はしく有るべけれ。寒山は、「我が心月に似て、碧潭澄んで高潔たり」と云つて、塵埃を拂つて見られたり。拾得は、聖人にてまします。「我が心月に比せず却つて圓欠あり」と云はれたり。爰は半月の時も有り。

滿月の時も有つた時が圓欠ともにかけぬるよ。賢人の心を歌に、「圓くても圓く有れかし。我が心角の有るには物のかかるに」、と讀みければ、又聖人の心を、「圓かれと思ふ心の角にこそ、有りと有らゆる物はかゝれり」、と詠ぜり。實にまろかれと思ふこそ一つの角よ。去る程に、賢人は時を知つて國に仕へ。時を見て山に入る。樹下石上に有つて心を安くし、「萬事無心一釣竿、三公にも換へず此江山」、などゝ云ひて只己れが心を養へり。嵇康は、「山澤に遊びて魚鳥を見れば心甚樂しぶ」と申されし。陸機文の賦に、「石、國を包みて山高く、水、珠を抱いて川媚びたり」、と云々。人も内に德あれば智を深く隱すといへども、形に

表はるゝ所、常の人に替りて善さと云へり。扨又聖人に心なし、萬人の心を持つて心とす、塵に交はつて蓮の泥に染ぬがごとし、寒山は、「清月を詠む物の、比倫に絶えてなし、吾をして如何か說かん」と云へり。拾得は、「我が心水に比せず、却つて清濁有り。先づ心事より掃除して見れば、世々の秋天月も又塵」と申されし。眞實の内證は同じと云へども、賢人は淺く、聖人は深しと、千古の記する文にも有り。左傳に、「少が長を凌ぐ」と云々。文選に云ふ、「桀が犬堯を吠えしむべし。跖が客由を去らしめつべし」と云々。此句の昔を以て今を察するに、寒嶺、伯夷叔齊を咎むるは、桀が犬の類ひなるべしと云へり。